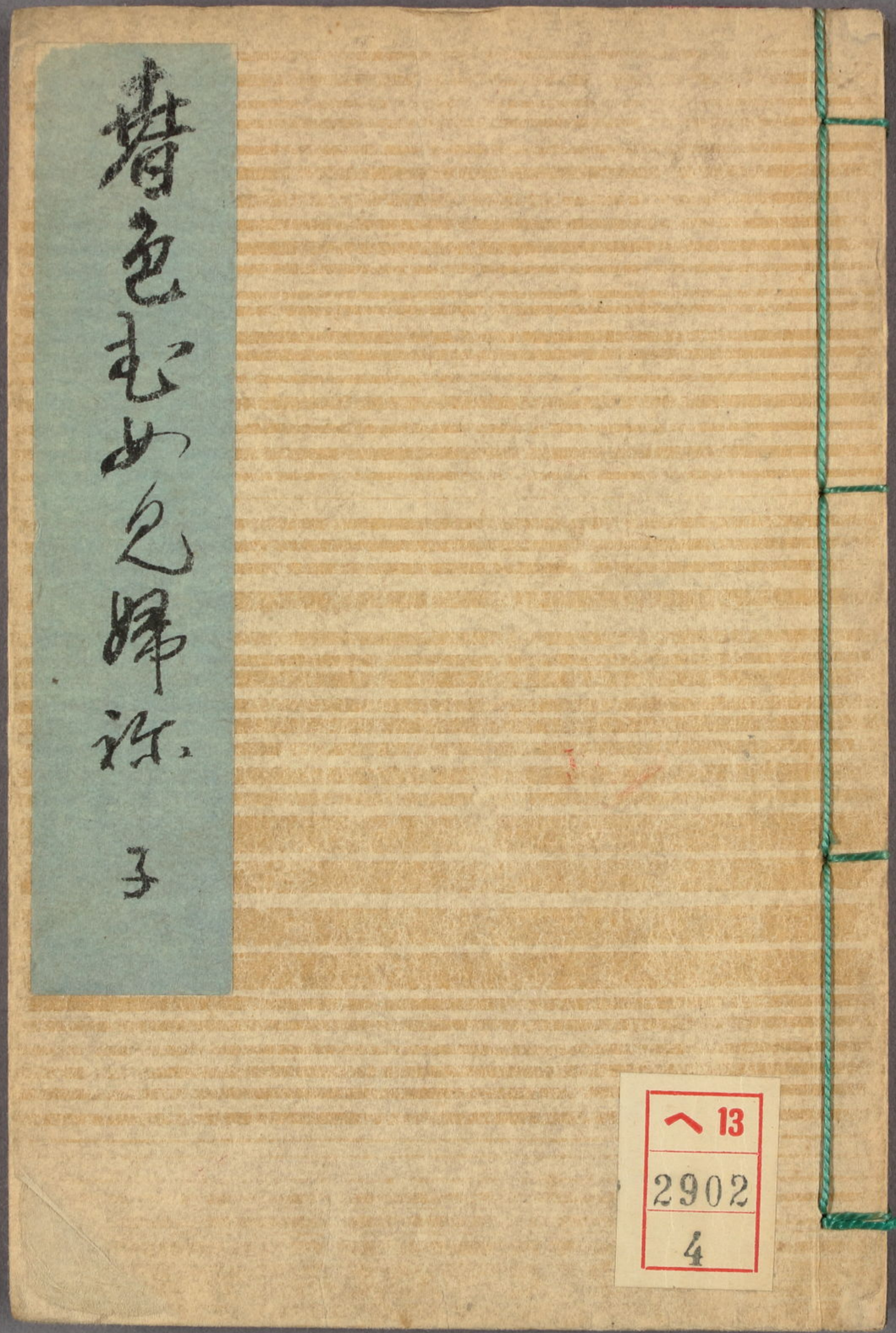


へ13
2902
4

門 へ 13
號 2902
卷 4

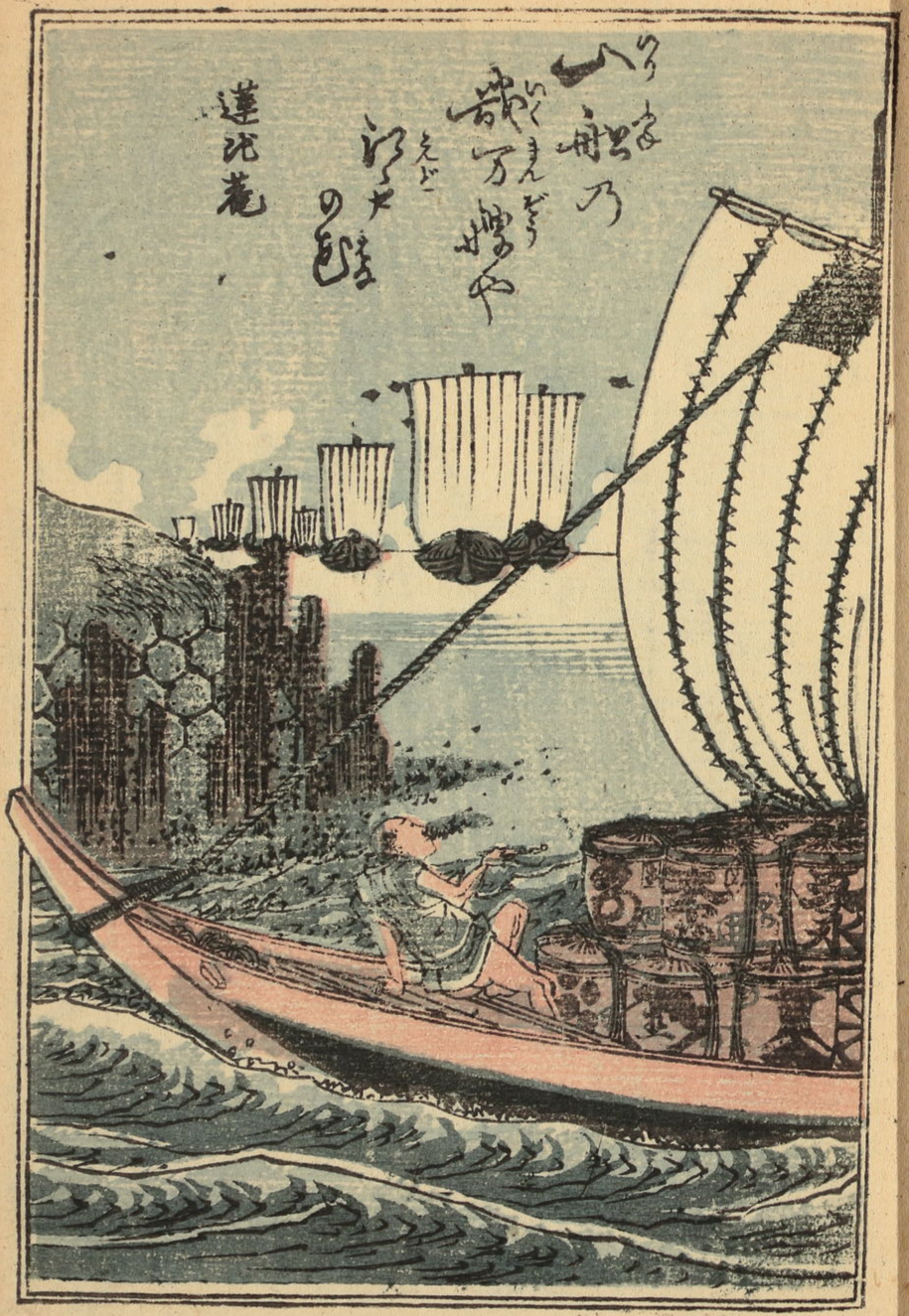
序

蓮池菴の一夢乃
文法を新て一家言數十面部
如あらつて平日之鉛槧
閒平笑詞あり善謔的

此書籍ヲ識別却又ハ紛失セシト云
者アル時ハ直チニ御報知ヲ乞フ
津田安麿

昭和九年
七月五日
贈呈

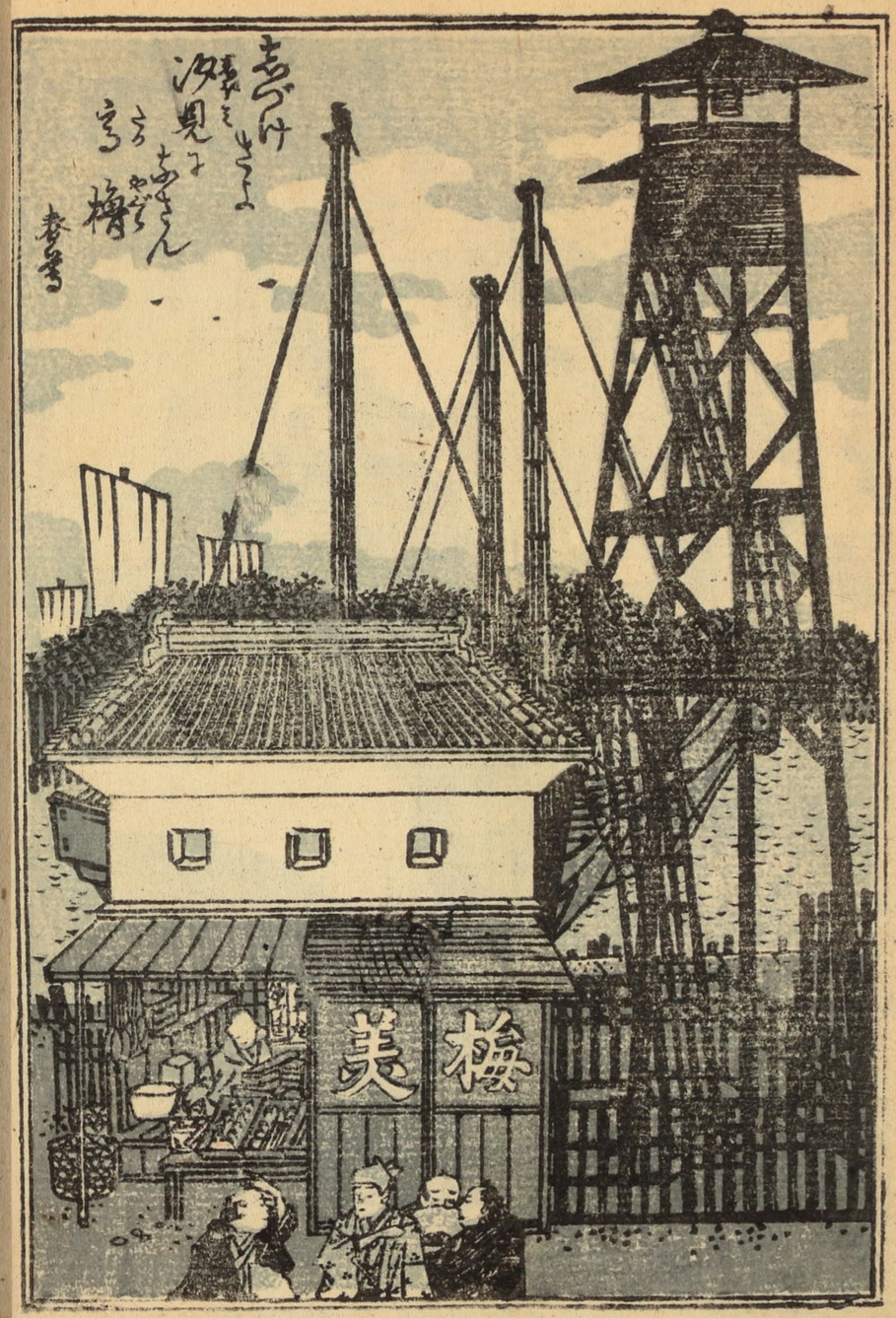
雜的恫的逢的訣的あり年人を
して憊こ又憊こ捺こ多在て
牧すこを斬ざこ
實こ江湖上の千般萬緣のこの見
聞するこ一掃再こ一ねむびのり此事
憊こ這ん話を說こ這こ主こ爲びて
此小官を做ひ這大奶こを爲
ど這小奶こ做こで人を差這
鄉ぢこ酸漿中こ入ら
まもるまもるく直こ一行の書法


蓮池庵

静香主人

水面無風
鏡様平
紅樓翠殿
映波明
三又江上
一輪月
影入千
家歌
吹聲

戸田藩洲
橋の霧



春色梅美婦禰巻之十

江戸　為永春水　著

第十九回

再說峯次郎の母親はお京を嫁とし　お多喜を囲ひ女の如
きるも種々の気苦労あて　縁者の人々を祝つけ赤峯次郎の
父を浮気さする　梅美を出せしより　無気な男ひとりぐみ
なるも　所詮八意角家内の腰を

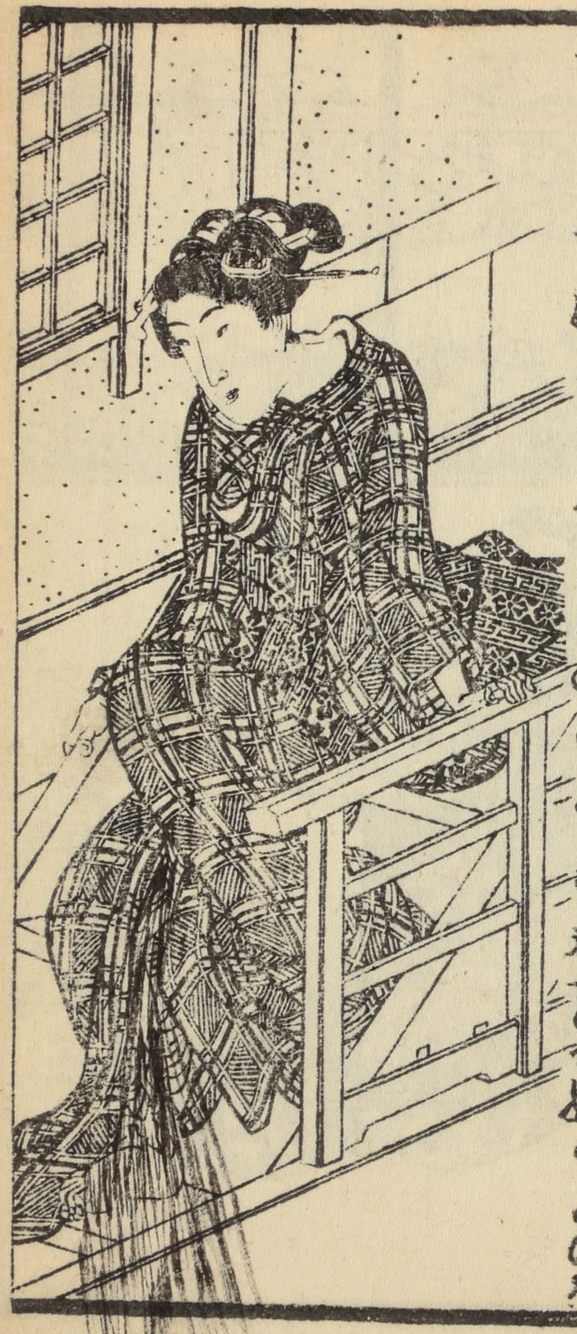
落ちぶれ 姉 捜び 出し 京へ 姑の 機嫌 とろうとねて
心配 をなせしが 姉へ こまごまを 不便 に思い お菜の方へ 仕込み
改めて 姉妹の 盃を させ お菜を 折第一本家へ 呼び寄せて
お京と くらべて 捜びを させ 勝劣を 電燈 にて 両
女の 悦びの うち 方もなし 峯次郎 いお菜が
本家に 落ち着く 時は 家内の 用のみならず 外へ お菜が 家は
久しく 時多き 房吉の 方へのみ 行 按ぶに お京も 物も
帰り 行 時多き 房吉の 方へのみ 行 按ぶに お京も 物も
お房の 方は 心 外 峯次郎 行 捜び 居を

男 ひけまくべ さまとぐ 女 なくそ お菜 物 心 悪 けり さまとべ
或時 峯次郎の 母は お京を 連 柳川 亭の お菜 行 会
つまづき 顔色を あおく 変へ 通り 座に 悪 お菜
の母は 挨拶 もろく お京を 見まべ 流 涙 落 悔
ぐら 金釵を 一 支 より 二階 渡 向 お菜を 呼べ おまを
ぐらして 峯次郎の 母 峯次郎 今日 貝は 来 檀 くと お帰 中度
こともあり 赤 仕 嬢 仕る 中 くら 兎角 気が もぐまべ ふ
ぶく と 賛成 松 み で 国 う ま べ く チット ま こ 仕 方へ 参 て

お茶と二人が和合して此の病気も峯次郎ホ看病さえ受ろう連て来つこのサそこで
つろ出まつこころる　毎〳〵ノ〳〵正宗今
これ毎〳〵アレサお茶のろでへござろまま母んハ峯次郎ハ何所ぞへ
で出まつこうこと中こと毎〳〵正峯次郎さん久
毎〳〵ヲヤ〳〵お宅でへござろまま母んハ久〳〵此方へハお出で
ろひろへお茶も茶ゴて居りまつこ私が中まゆハ何も
茶ごるこへ多ひ大略お見世がおろおのそごへ此方へお出

ろまろおろがろひので在ふと中て居りまつこ毎〳〵ナラ〳〵何処
ろつこて家業のところをも伺ひでまろ処へバヤ今ハろひ
けまごでも久〳〵ぶりで家へ源ろそろまろひのホ留守の
さてのへ茶をも呑て〳〵お京をも姉ホまろ処ホおろうホ赤お茶の
おこまろ余ろ気多ひつけごこ思ふろ此所の家をこ〳〵ところ
所ぶお茶ホ方ホ取ろ元が買がまし〳〵お岡でろひヨホ践峯次郎の
ろこホ〳〵ホ私の苦労を主ホ分ろ思ろバホ柱んで歩ろ宜ひ
けまごで世ろそのところホ昼半日歩ハ二更とろ三更とろ時刻を

極て家内へ帰る物ゆゑそれバなの
此娘も気ハものおもひが他へゆ
今ハ寄つきも此方へだろう来て居
だろうと私が世間へ笑えそ添
可膝そふで於家女ハよろこふけ
好ことのふことを思ふこと峯次郎が長居をせぬ様ニ
ほつそもようさそふなものごと私ハ男川て居るけ
ものねぎな腰姉娘ニ子お京よりお菜の方を本家へも入度様ニ



けしごとも然ると私が稍のう
同じ縁者の娘でお菜もお京も
方ともふ可膝ふ寒うハるし

菜の葉や　ふさぬ袖の　ゆく末

田舎の身上致仕舞てお京を峯次郎に添せ度とお親の
願ひまことに賤しい心ごとお思ひなされませうが夫に付てハ大金も
峯次郎の方へ遣ひました義理もあり四方八方の借財ありこと
私が骨を折稼ますれバ漸このごろ峯次郎が私へ對して
分程毎でもまゝ人恩報しに気を休めさせても給ひましや
ありませんウトいふ中にお金ハ化粧をして居りますが伯母へハまだ〳〵
しくハお京ハりやうりおとなしくお金さまはその婦のよふにおりませんまち
まち遠慮をすらくに話をまして言ましくくこらゝの家峯次郎お母もうちとけて
それよりお金とお京ハ下座敷毎朝同士二人のゆきゝ手まりなどしたりさせて
ゐたらぎみがら峯次郎のこゝろもちのよろしくなることをゆるくそうしける

此時お茶お京の二女ハ下座敷の中の間にて三味線を出して
遊べ茶見勢の方ハ客もなければ下女が茶屋の傍に
居るのミ両女ハ浄瑠理をうたひ居る

上「よしやしきの山めぐり四季のながめも面白く
梅が笑へバ柳がまねく風のまにまにうき身の
手習そよで深山の山吹さくら花の便りて人
「まつ風にも山吹も見えてぬるちらちら花を待ちて
さやかの花とぞるゞるゝ「そしてあやめ菖蒲や

かまうどころそうと時鳥　あれ文字ふれもの
まち風ぐへ一声ごとに　小荻のたよる
ひるやあるらん　紫式部の　おもかげ
うらみつらみも雲ゆきも　依依の
夫のいる間がさねヨイ〳〵。ヨイ〳〵サ〳〵ようやさ節
初もゞ二松も杖つく老の坂　三下りテンツレ〳〵〳〵
ポンポン　京一ヨヽ〳〵
とうちやすふあるヨト戸棚をあける　京一何処しまも松きやア

義太夫きやうが出そうなひよへ　多一ナニ左様でもございまして祖の
所や高つうとしこと文句のところハお妹のハ吉やんとしてヨト
のハ折々見物へ客が来りけるび　多一ヘイ左為入ます　トのくるり
と　見てゐる此時見世へ体ころ
きやくまさんぐれ　客ハ二三人連ゐて仰々
しく　京次郎の婦多川ハ招び居る
ゆきをして降りくるぞ　多一田舎源氏の十二編をあけて

再説 ▲峯次郎の母 ●お条の母 ▲二階ゆえ酒くさい女のこえの
こと峯次郎の身のうえなどとうに会て居ようが
下ゆえ浮世を聞るどう ▲「ヤおーい所で
糸が切まてこそこざ ▲「ハイそまとお見世人まち
お客がお出の様子でござりまし ▲「ハア左様さ
道理で止まと思いました ▲「ホンニ左様
切まてこそ ▲「ヲヤおーい所で ▲「アおまち
初老の奴さへ一ツ二ツづく載て今ふうで

見ようとてござりまする ▲両親のとをおりの出ー
まするよ ▲「ホンニ左様でござりまし
ござりまして ▲茶勝ふうで ▲親のことよりくみどものまち
家じまうが ▲何程もござりまし ▲その
せんヨそれどうぞ ▲親ごころとむつー
遠のうとぞんじまし ▲「イエそれ
でもまづア ▲お客人宅の ▲仕舞
お茶でも ▲揚ってお ▲ーへことを ▲見ん

あの松ヶ娘さんどもハ當時ハまだ幾歳
娘さんバ何程ぐらゐの年頃
三人ハ揃ひもそろひも下の娘達と入かわつて出ます
そしてあの姓するでハ御捨てゝ
うか女のやうにバまだ放蕩もせんハよへ全体ハ生れ
分がおやさーのくせ私どものそばごと思ひ
召そお世話と云成て出ようツイみどもも笑ひも出ず
まーこのでまゐとやまんとお房や御家ごうのうそ

おざりまんハよ 一イ五 左様でハござりますせんヨ実ハ今日
お京ハを連て此所へ参つたのハお前
まるでお家ゆも美理生 初ての
小言と云ふべて言ふと思ひて
何様のふ事でござりますら
宰の出ろ中本家へ降ろ
寄せて壺のごらふと思ひてよ
のべあの娘ハ姉さんの為人 嫌ひ

そぶろーへのと門端のまでそろうのふうう共で松がお家共連て
来て峯次郎もお茶あもお菓あも取入小声をかうよと思つて居ようバテア今しがた見世へ客人とちの噂でへ此家へも寄つ
ためのふの不将忙まそのがいまの左様して鬼
もと此来お意やお菓がのへへそもうるごらんと
宅ふア並ふしやアめうませんの分をのへも両娘さらへ
時も娘如とのこもふーもせんの分をのへも両娘さらへ
ふそそも先刻の噂をよく聞乳しても是非峯次郎の分を入うる

但しまた親をも両娘連も男へうるうびのよく今
度へ勤番でもして仕舞へうるけれども私も男那の新人舞
ふて演うへうみけと言ふ所ぶ左様うると峯次郎殿ふ苦労
さすこ娘こちふ乳のまあうホンニモックく私やどもでも乳を
もむ者もあるまのと男へまた男へヨト言まそふー胸を痛めて
も細く他を思へ身を思ふやう峯次郎の分ぶ言う女郎ろ
娘人ろ順女のうふ動乳を積そう摘のこ意乳地をこそる
相手の女ぶあて男の身を懐こ是非ともこうべへ

左程なる時ハ二人の娘もお主まで苦労を廿一年来文のうきこのごろ打ち沈み実情のお房お条が心の底命も捨る不了簡を察しまだきこえの欲しものうらやましさん と胸を痛暫時言葉もうろ〳〵ばかり也を推しそのやつれ果たる姿を見るにハ仕松〳〵と訪ゞお条女ちごも両娘しもを見るにつけてもお宝まで〳〵お宝ハヨサア〳〵と気腹立〳〵ホ宝一ツお呉りやるハイ〳〵お条さんとそお気だ〳〵ホお童を成ま〳〵トまことさうぢきをめぐらしてうさをはらさうけり

第三十回

義理の柵と情のやどり楽しくも極意とゝなれバ両白ハ只一ツうつて丸分の甘〳〵至の実意も不実とゝなり他見でハ恥ぢ入めんぼくなしバお条房吉お京の三女が思ひくの苦労ありて互のさうぐの処止時を〳〵さんの人苦労と辞宝を生ぜしのぶ表の情と意気地とを迷ひ入壮年人の男今更のハ恥うべ〳〵さてもお条ハ見世棚の人の品宝あ

画が實ホりくれと

面白き翁のうそぶきを

ゐうとうけくる嘗の客

「アそこへ山ごろの藤さんとの、風形ホ葉うこのごョ

毎年奇薬を摺ものをお持ごさり京ヨヤ左様ごサ巾峯さんも

狂奇をお頼ごさへくその程くくへ峯さんごョ京ヨヤこれが

久「イエそれハ文真さんとの、お方のごョそ京が峯次郎さん

薬を画ごさへその中でとまぶ一番評ね人「何ほど京ヨヤこれサ

そのすごさまる笑顔ホもくく

とゐかけくる薬ハ順女風うそ姫姫

ゐまでも騒しげなくお言ハ元来信高き松ゐる生ゐを姉の

好みそ知ず化粧ー乙女風往来の人も立留りて見物ぐら

二女と誉そ初ゑ「ケなく私うーけまべお京ヨヤ座の方へ

向そ狂奇桃湯の松ゑ張ようむぐめて

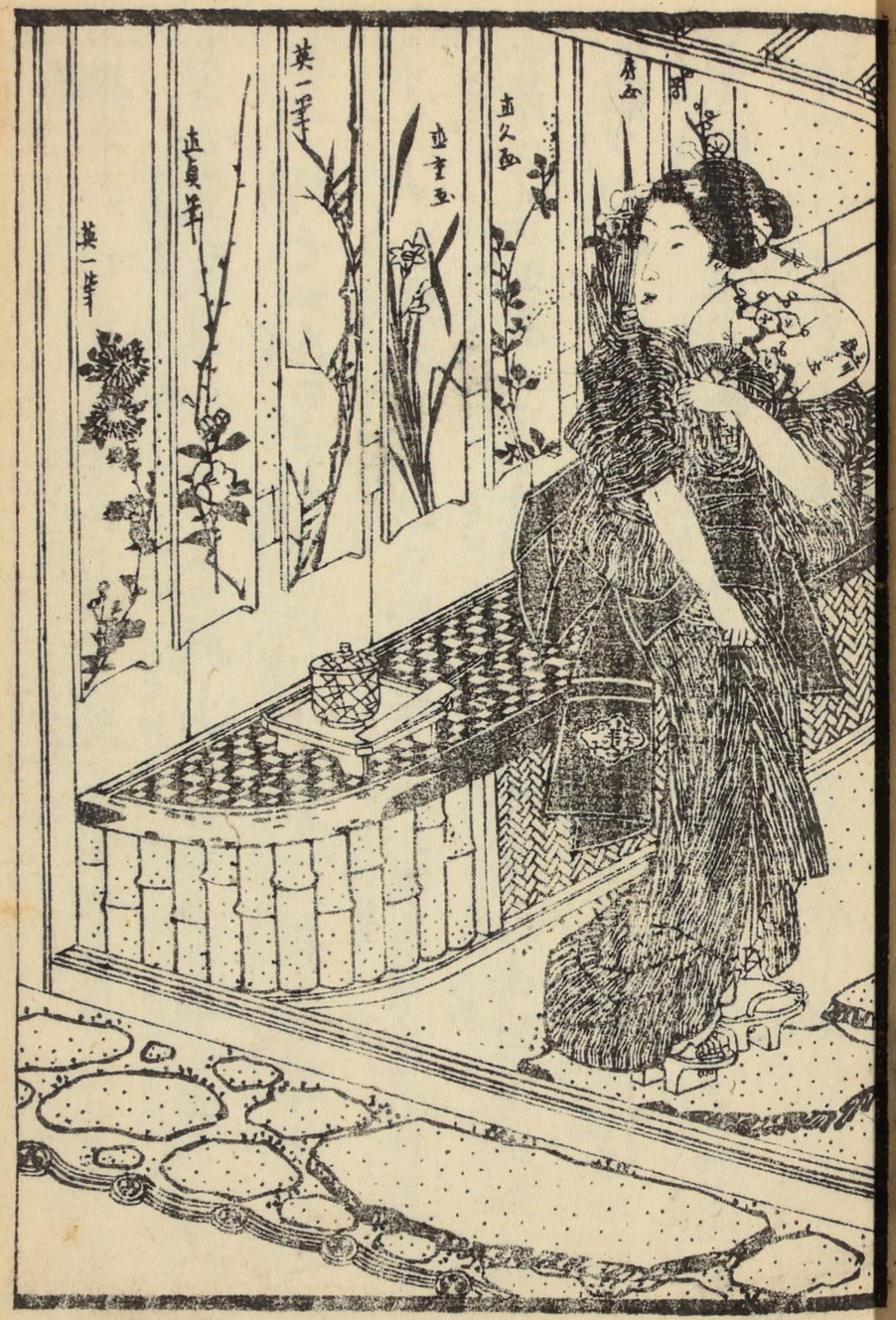
居る書画の大人の舎自ホくるひく桃湯の題をまるーくる

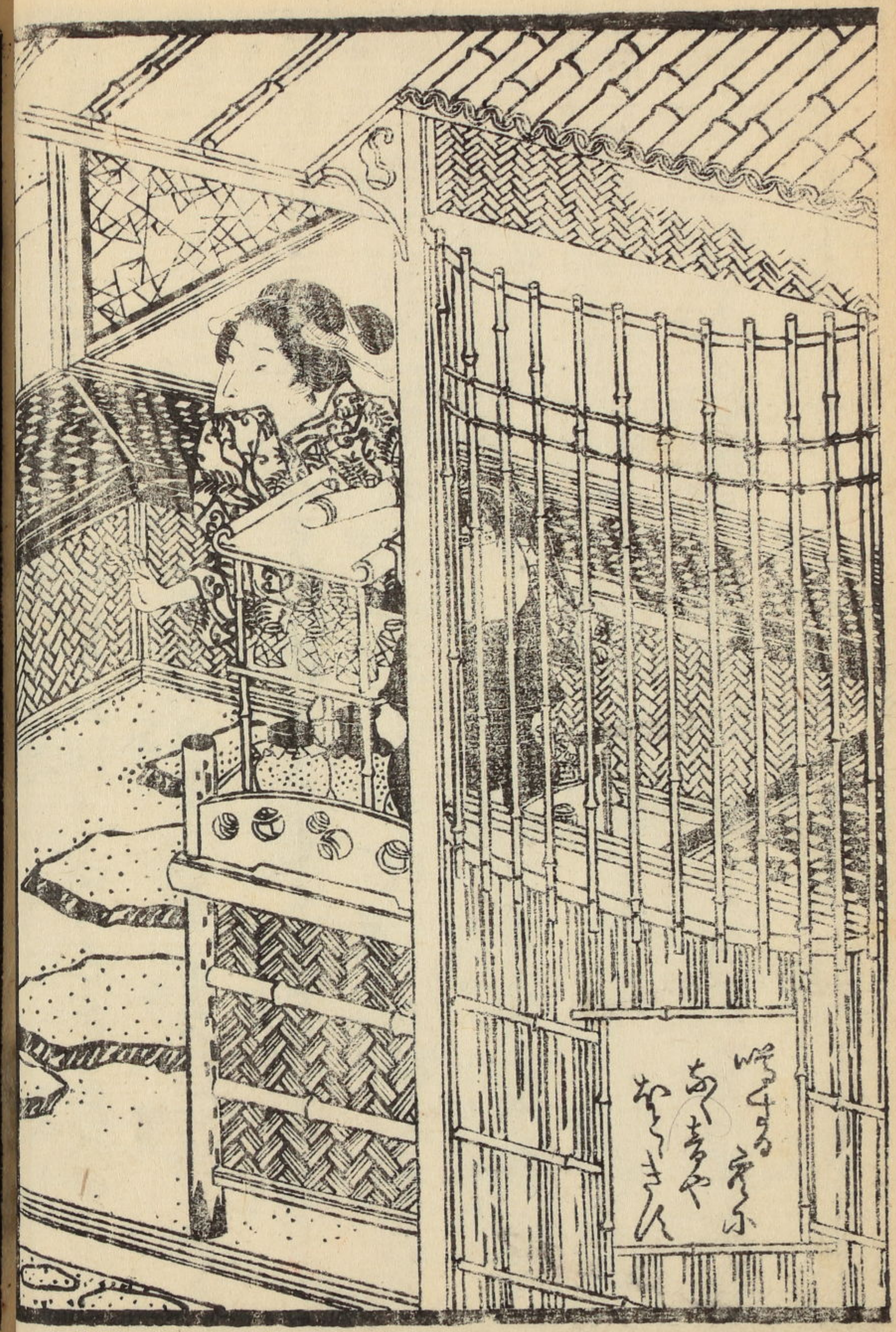
月並の法燥そのゐ番附ホ張てゐり京ヨヤ「何れも奇

のござい　京「ぞうりでも手が似て居ると思つてハ画ハ様ぢや「画なら英泉の弟子の英一といふ人が画きのでござあの宮ハ国貞と英泉と寄合書ゞョ　京「ヲヤ柳亭種彦といふ人が書てあるのへ「アゝあまり宮に久しい　深くは田舎源氏の作者が縁ぢのせ峯次郎さんが覚て居てお出のぢョ　モウ二十年年にあるよ舟

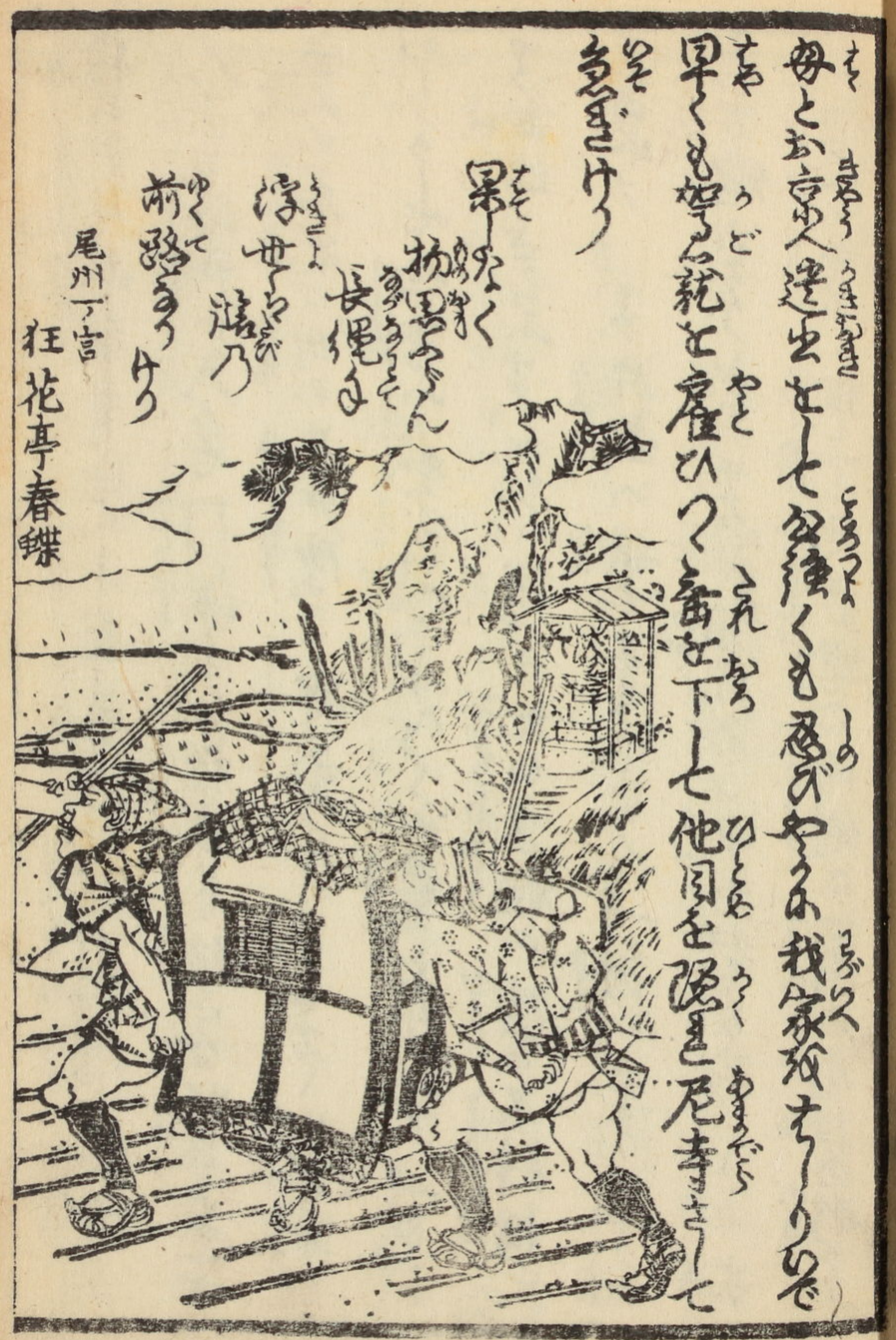
上野山ハ花の吹雪ハひとつねど
わかりに笑ハの論　竹亭森もあり

「ヱ生六総いが峯次郎さんハ今月で　モウ　幾日やど宅にお茶をなひのござへ　京「ナアニ日中ハ折節お帰りなされますが夜ハ少しも宅へお帰りでなひから母人さんが此方へ参りて来てお傍にゐると思つて私を当分姉上さんと同居にさせてお置きなさるのでござりやす　[illegible]宅にお孫さんへお気の毒でありませんハ　女「左様之丈ぢやア先刻のお客達の話ぢやないが気と私も母人さんも能見る所ござりますへ　京「ナニ私さへ少しもお孫さんをよく思やア　仕るせんが母人さんが父ぬぽんの　[illegible]英人漢るひとりで気をもんでお仕なさるのでござりやす　必ず私をよく思つてお呉れでないよ


英一筆
立真竹
英一筆
立李玉
立久西
春西


いそぐまも
あくまもや
なつきん

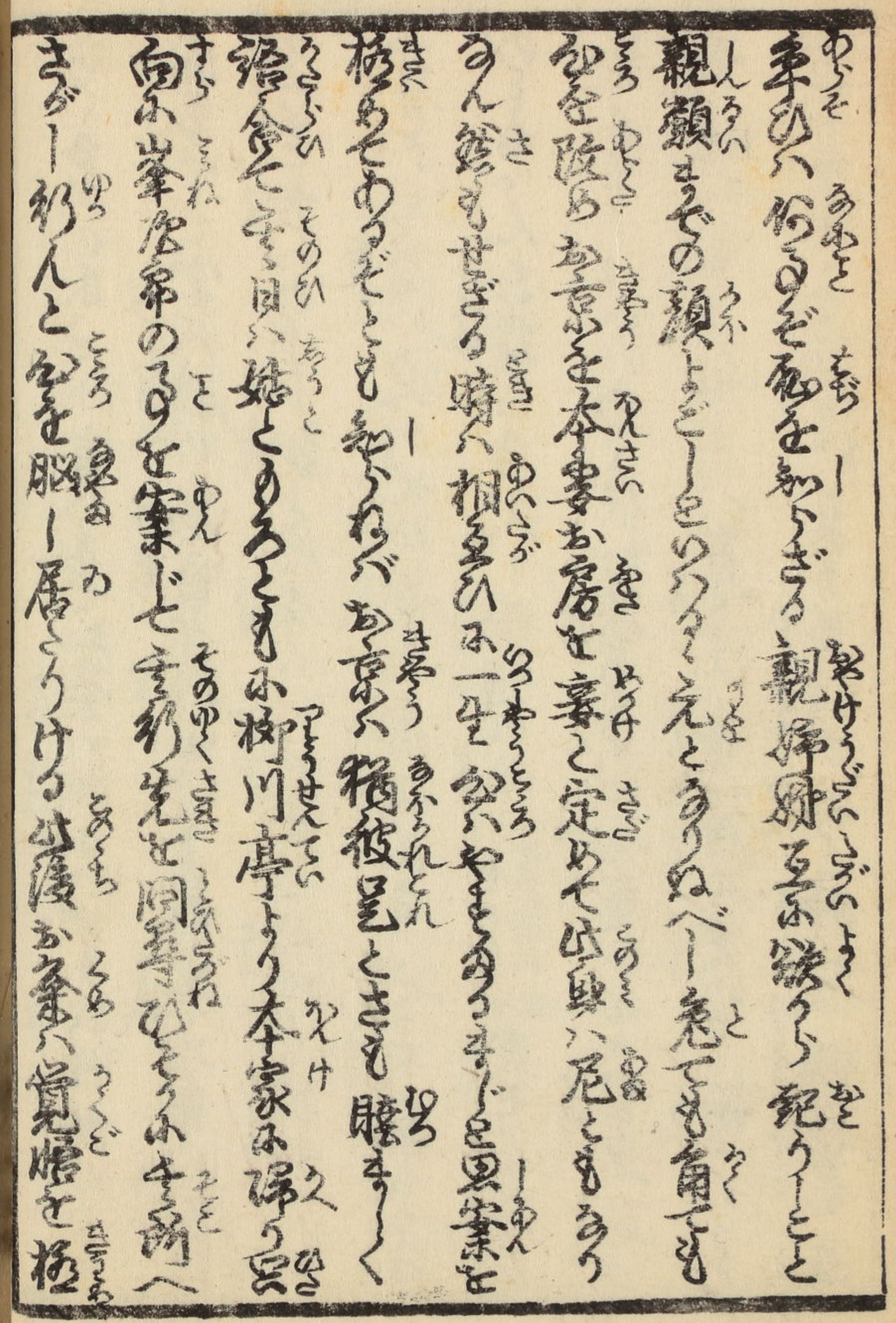
ヨ姉さん「サヽるく思ふものゝそれ丈ようう私も思ひ先刻のそるさと言ふ度峯次郎さんが歸ると知川の噂女う聞く者の家へもろう初てお在のごと思ふく京「アヽ夢見ごゝョ憎らしーいつまでもヲヽまごゝナニヨ姉よさん私きやアまごゝおあ己ふるうのへけまごゝもお糸さんのお姉ひのお房さんとそおやアのうませんうそこお房さんふお糸さんが雅頼んでおきく宜らふよへ私の方へ峯さんがお泊りでるくうてもけ宅をく帰うてお在ごと本家の用も早くごるふ今ー母ひさんも安ぶまくるひのふよへト言ハまとておきく聞うせごゝ実ハ姉の房吉ゞ外ゆハようや峯次郎のおをうふと方ハあらゞゞ然とそ今ハ別まて此所と彼所と隔たまびお房ハうへりて此姉を身体ふうりそこ乳楽るうのこうんとまひうゞゞ一両個の母ハ峯次郎の母ハその母ハ更ゞそこもおびおせるうけゆへおびお房のゆ処今更ハ母や世うへおうる時ハ峯次郎よりお房よう井一他ハ笑ひ、嬉りハふ身ゞ先ほーて淫蕩ものよ悪性る姉と肝で一個の男を妻



安とお京人違出をして互に怪くも思ひやる我家故ちりのそ
早くも帰り就ては屋ひつく番を下して他国を張を尼寺さして
急ぎけり

果もなく
物思ふらん
長堤も
浮世ちよぶ
落乃
前路哉

尾州一ノ宮
狂花亭春蝶



幸ひハかりそ命を助る親婦別至ら悲うこと
親類さその顔よごーをのくえとうりぬべー急てもかくも
命を限りお京を本妻お房を妾と定めそ此與八尼ともろう
ろん終もせざる時八相をひ一生ハやまるまじと思案を
極めそおくれバ猶彼是とさも瞋ちーく
治定そこそ国八姫とのろこそ
向ふ峯岸寺のりを案ど
さぎーかんとを脱ー居

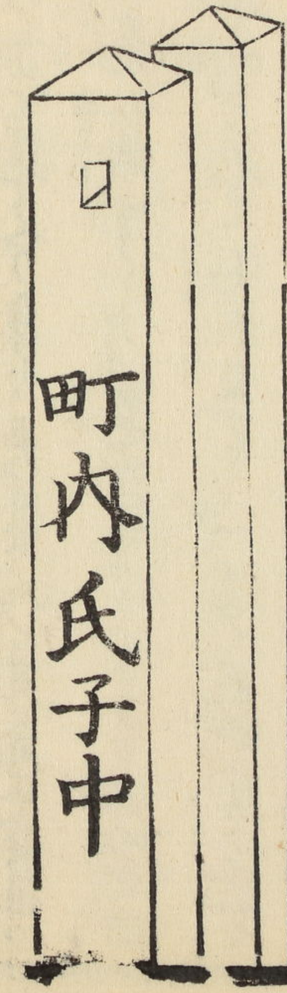
頃六月中旬あつけん小歇更こゝろる町小路涼こゝろみ出し
人〳〵ハ外戸ハ入りそ門辻〳〵ニ社集も絶こゝろ折ふる十面
五人の若衆が町の井戸際ニ寄あつまり「サア〳〵late早く
やう〳〵七仕舞ふじやアねへかうぢ
ゐ丑時ごろふナア。ヤレ〳〵誤ヤイ地口方燈の棒を不残棒て
吉のやナ「モシ伝倒ハ捉てあまろこゝア「然ろ〳〵そこ〳〵学ア此
大方燈だろうごア「サア〳〵消のあるゆふやうせ〳〵ト木
戸のよふ「コウ〳〵組上一大方燈の両側ハ二階の屋根の軒へ
宝代のごとくそこらへるその両面ハ仁田四郎ゐ大猪狩
ゐ倒ゐ画と富士の裾野の巻狩の仮家ゐうけ「紋ニゐ
さもものゝ〳〵画ろう「エコウ今年の画ハ國直ゐ英泉の画
程ありて評判が能ナア「そまたハ初てこゝョ画の役者ハ
ハアナ「ヤレ〳〵地口方燈の似顔ハ真ニ堂がうまく
ゐ画さごせアゐのう國貞よりもまさるごア「サア〳〵明ごろ
ごゐアア人情本の画も能学ア
能〳〵地上へハ何も有ハ先刻氷ゐ賣が有ハ

ゐやア　がつこが　泥土ふるうちやア　みるひろ　メ「ナラ〳〵大丈夫まで
ひろ　しん　　きづけ　　ござ
遠が　来てあらア　気配ねへくらゐ下しやう〳〵　▲「そま」　傍ねツ
　　　　　　　　　　　　うけ
　　　　　　　　　　　　ぜ
ーヨアくりの風ごナア　モコウこの風が　御神楽さうぐ時
ぶん　ゆそ　　ひろま　　ぜ　　ぬ
分ゐ　ゆそ　メ「十二日神八風が　吹てゐ暑の
　　　　　　　　　　　　ぜ　　ゐ
ア　ア　「ドレ〳〵身ゐあそ　ア分て
　　　　　　　　　　　　ちと
仕事ぞサア〳〵　衆人が働うひろモノ　生ごぞ〳〵ト大勢が
　　　　　　　　　　　　ぜの
祇園ゐの　方　跡とうくづけ居る女人髪ふり乱して
　　　　　　　　　　　　なひ
逃さんゐ矢ー来る一人の　ござ　ひろ　ぜ　ゐ
　　　　　　　　　　　　なひ
明つゐ　ゐの　ゐ　聖ゐもまさうる
　　　　　　　　　　　　ぜ
世〳〵く　資源の方を見くアうゐ
　　　　　　　　　　　　ぜ
女「ヨヤ真平ゐ免さ成ます〳〵ツイ急ぎまし〳〵ト　ゐの
　　　　　　　　　　　　ぜ
方ゐ居うる若元が見て笑ひ
　　　　　　　　　　　　ぜ
祇ゐア　お家の格うる実当ら
　　　　　　　　　　　　ぜ
ござ〳〵ゐとト戯言のを聞狼ハ
　　　　　　　　　　　　ぜ
舎の尼寺へ参うゐ　仏祖　ゐ
　　　　　　　　　　　　ぜ
逃ひも　せゐ中ゐ　音うく　地ひぎさせそうゐ狼の

江戸　爲永春水著

第九回

さるほどに頭天王と申奉るハ神代の御孫ゟ猛き武神ゆゑ素盞烏尊とゟ申奉る人皇五十六代清和天皇の御宇に播磨国ゟ山城国八坂の郷ゟ遷座ありて奉祭る故ハ祇園牛頭天王と崇奉る最古ゐ観十八年ゟ今天保十二丑年まで八九百六十六年ゟ成るゆゑ



春色梅美婦禰巻之十一

町内氏子中

猶 そのよう古く人皇十二代景行天皇の四十年に日本武
尊東夷を征伐の時走湯の大権を素盞嗚尊の
御子のふとそ始て東國の鎮産土神とあらはれ
素盞嗚烏尊の
悪の池の西北なる根津大權現則ここより実の武運長久
災厄退散癘病除の
勝る神霊はやくに名あらはれ江武のおのて根津權現は
日本武尊の武勇ある
神なれば素盞雄尊の神功はやもすくく
略

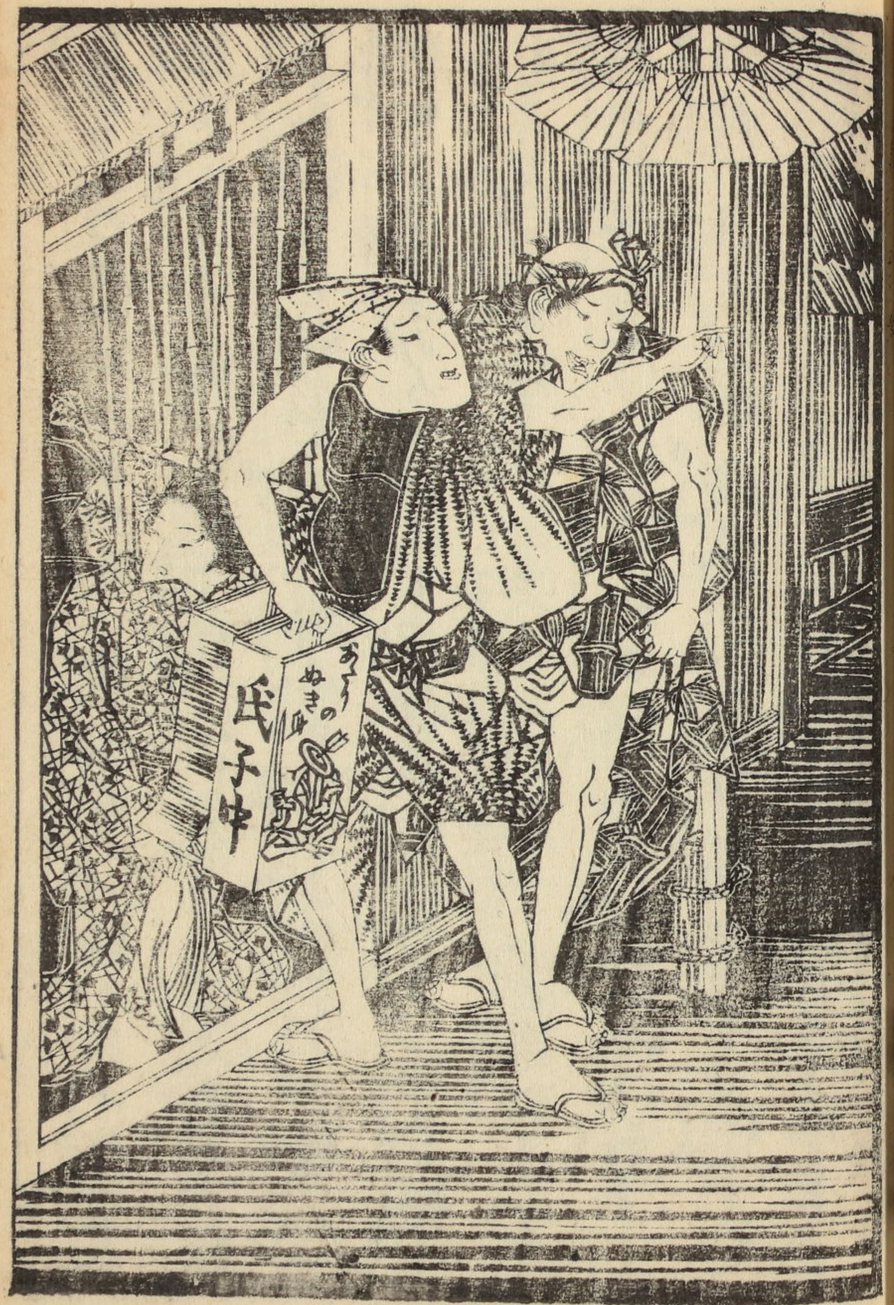
うるべしまふ根津の社ハ千七百一十二年のむかし在せば
山城國なる祇園の社より古きと七百六十餘年の以前より
赤牛頓天皇と異名を稱ヤ両部習合の説ありて諸書の
あやまりもあれど神代の遠き昔素盞雄尊の除ふ稿く
荒くしく在ませば天照太神の御勅當をうけ日本の
國の中ふ住ふことうるべと琉球国ふ大巨呂人の
大王とふ人の家ふ近付宿をこふ多人どもを巨呂人ハ情を知ぬ
賊主うるとべ殺しく彩て貴ふ入るべ却て害しんと汁

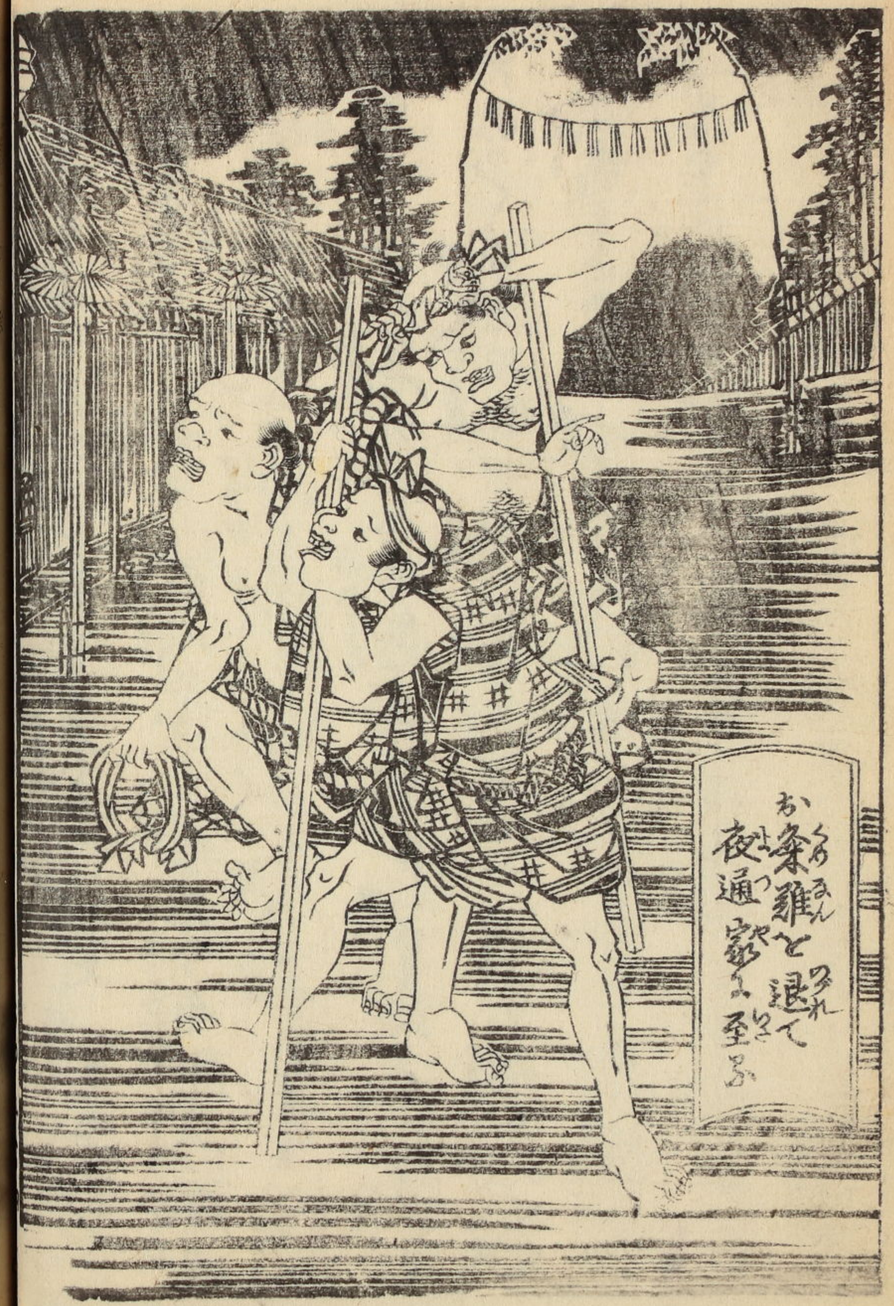
ものども　ものを　洪爺八素戔嗚雄等も動當のいや臭ゐを嗅ひるけまゝば 迚
る　方々く　を尋を退き蘇民ものゝ　會そこき者の家のやう宿を
りと　求めの人ハ蘇民ハいと貧しくの人ども甚悲深き者なれバ
のゝハ　労り心痛をのう〳〵屋の仮を進め奉る折ゐ異國より疫
ぐき　鬼の押来るを　を　まのゝ蘇民が家の入口ゐ茅の輪を
つく　造り神法を行ひ遣を除ものゝ主翌日より一村の人ともぐく
やくびやう　疫病ゐそ煩ひ死ゐけまゝども蘇民の家内ハ除ゐく疫病を
のがまゝより　斯て蘇民ハ蘇民の別且一ものゝ第　作せられけゝ

叫ぶもまゝ　疫病の流行時ゐハ蘇民ハ孫と
書そ　門口ゐ張ゝ置ゝば疫鬼の家内ゐ入るゐゝとゝ教へ
のゝ〳〵ことのゐ実ゐゐり勇ましく　簡等のゐ功ゐゝば後ゐゝく
神力ありと　在り所日本國中ゐ素戔嗚雄尊頭天王
武塔天神とも　を祭ゐざる所ゐ
所ゐそ等の神輿を修造て氏子の中を渡〳〵疫病を逃まり
ぞけるのを行ふ六月の祇園會ハ三十ゐも　初りくるのゐ
用ゐ　旅てあゐ　ゐり再説天王祭りの神能大行能を仕奉

かくて一年許り経て周家より迎ひに来る一人の娘乃母おく迎に来る
三三人先立て一人は女房丁の研ぎ物を持て右の如く引
提て後より續く二三人の男は棒を持て大勢
娘は駕籠の四方を人重に警固して駕籠口へ入るを待て近付三人の
くも推しと脊後の路次口へ入る娘ら通りは仕やせんうよ「エヽ娘ら
モシ今此所は十人丸ゐる娘ら通りは仕やせんうよ「エヽ娘ら
今道成ゆくとも何ぐうも臭をきゝ七夫を待ん「虎「何の所の
方へ行やうよ「答さ何所へ行うが此先の

横町をまがりて逃て行く「そのざま人
まねくよ「虎「娘ら女ゞア盗人めゞト言ふぐり夫婦ゝ脊後
見送りて肚立まぎれ娘を隠せ一路庚申入口へ入りて信
切ゐ「トきゝ手「亀ひ同ゐ合許ざうけノッ「さまゞバサ一人の野良
やゞぴうゝ光る双物を持て居ゐゞぐうござゞメ「亀コウ姉さん
手分招ゝこのざう分でも娘程要ひるでもきこのう彼奴ゐて
捕まると殺さるでもまう招ゞ双物を持て来ゐ奴ハ大ゝ方
お菜の丈夫ざうよ「分でも おそろゝの面をゝして逃失て


おうぐうぬきの氏子中


お傘雑と退て夜通宮へ至る

来やァぐろこがお栄の丈夫じやア
「ハイ
踈しそよさくらのごろう手を踊るを
見てりの
るの狐気を被りて向の人掛合を
逃出しそ来さのろ密夫を同伴ふ逃てこの人ト四人
壮年笠ぶ密夫ぶごそ丈夫の鬼若ら是逃出しろ
「ヲヤ
栃ふ推量ろせそうべ手越ふ同うまべ娘八ひうべ私うく
「ヲヤ
赤猫ーけまべはや涙ぶぐふ身のよ父わうまーぬしそ
「ヲヤ
関せけろ
（本文ふつづきそろの女がおげきろうーつけをくそ

千種ふまぐく虫の声赤二ツ三ツ蛍萩風八涼しき由
「ヲヤ
南の畔を宵を花もろ四ツそ聞ろ
「ヲヤ
つ往来うハ一丁だろ西の方ろる森の中の茅家の
「ヲヤ
茶へ聲る絵を下そ虎「サア
「ヲヤ
「コレく黒森女と言やそ顔と
望ふ正体がるくろつア
「ヲヤ
望ふ父号ふうーと代つふハ今
「ヲヤ
此方ぞろふ楽ーそ母そ丈うろ府へろ連て行やア
「ヲヤ
色ふうろ西狗ぐろ有ぐろく思やナトりふ中ふ
「ヲヤ

取て掛る折の中より
まづ一個の美人四辺を見まはし則
別人をしばり被婦多門兵
振捨て足早へ行んと途中ゟ雇ひ乗る船頭の者ども
が男のもとゝいざる悪人ゆゑ鎌倉人
幷人連まゐりしより
れ人 虎 おまとうりサ本街ゟ
内ゟ、進人が至らんし一件方の脇差用ゟ悪ひゝ

田舎ゟ横船遠て件人連て来とのサ。サア
まづ今我ア此家へ止宿と極めせん 虎 ハゝゝ
宅ゟ諸道具もなし一夫の気もなし不貞ゆゑ
れ人が手代ゟあへ隣家ハ遠し一往来の人へ通りしに言
隙をとりても空人ハなし一分を分捨せうと遠ゟへ不入
のゝ

ト勝ほる戯言を仕ながら二人ゟとも茶をよもうひ
いと吉びる草庵家の内へ入是幾久を賀して

謂ひ並ぬるの酒肴など取出し茶菓に酌を言付て
酒汲かはすも其風情はさながら親子の体ゆへひいくり
昔絵本の大江山酒呑童子の有さまにて茶菓をさせる
から衣あると言ぬおやぢの悪逆ひ扮で不道の行ひなし
ゐねまさき振られバ茶菓ハ帰に備ほ衣物をも取合居
たりける
虎「コウお茶菓其様に背で居るのはないぜ此身をバてまと
まるで去まりよろ。コレまんざら知らねへ顔でもあるめへが訳つまる

些とも覚へて居ませんヨそうして親やさんは心易くし
てゐらつしやいませんのヲ　虎「コウ其様事を此身を安く直に
言つて呉るのハないぜまさかに此身も腹の中からの鷲
親うきでハないのハナまたでも近頃まで深川通とも言れ
まで一人や半分ハ和哥町に情人も持て居た藪やの虎さん
だア今じやア零落て此様な所へ来ては居るが内証さ
親るの親うきをも仕ては居るのはないぜ汲來其方が素人と出て
始めに知己になつたのも其時分から念がけて

居さが縁があまばこそ此程の事ゝ雖も出られず
のび出まさのご。モウ彩しても陽も家まで見せこと上ぬア
吾意ハ言せれく行注此方ハ余ぐけでさる住るごうう
覚悟ーて自由ふうるが彩ト悔くーくも多込めの祖
退れぐこのき御衆の紙筆注方ゆくぐ見へなけり
彩て三人の悪人あくへ飽まで酒食をこーけれバ虎
八八御衆の膝を抱とーまて屋の二人も酒機振の倒
まて正体ゆうりーぶ御衆ハ一生養命の神供を行つ

頓て主家を逃出しー東西南北の當存ぜぐ右
よ左と矢先りやうくふ町家へ出て彼天王の大行
雖を仕業場所へ逃参うーまり此上貴殿を牡筆
ぎふまでーけまバ条場の人くハ蓋をうこうーー
ーイヤハヤそこもアヤ止ふバ今逃失て来さんご嘲ーごア実
へぶ友達も一同ふ・ーそこまでまうふまでも
同ぎて居さのごと彼奴ぎ成ようき倒ーてありく

させてやるよりのヲ
とるの八分来ぬへう・ヘイヤあらー盗人猫ころのよ
うなう今のまさ此所へ出てうろうろマアく頭の宅へでも連れて行て止宿せてやるが
よ冥らのト
さーも寒意の壮年気僕俄の人こう頼めーく
お条七分抱してそ主町内のびんぼうる人の家
ぬぞ伴のけろ

銀河自然と娘へ近くうる冷気を催時刻うーむ
お条を頭の家へ伴ふの若元のそのを閉て立出る二十
二三才の婀娜ある女此家の娘あて多分お稲とのよ
顔を見合せて何ヲヤ条吉さんくマアお稲さんの
サアくおよろる小稲さん宮ゐお久しぶりぐろ
まんまエト互ゐ挨拶をするを看て此家の主市平三陽

市「ヲヤお稲の友達ち　和「アノ和哥町の居さ時ハ姉様の
様よ為くシでアよ　市「ハア然う更しやア　猶更のこと遠慮
のこと奥へ行て嬉と二人でまゐくお休なせ成定そ
労まもめらよ。サアくうまうぞ　行なせ人「イヤ有がよ
ね「アレサまゐくおよろこ私だりで誰人も外ハ
居ないト雪行ぬ休なへ奥の方　市郎「誠ハよ今の
若衆の向ひ　市「サアくお除うお茶が湧ぬ内早く
休ひ冒らよ残りさ片付ものハ明日ハまるが神でま

ま遠でも　ぎまをを悪のうふ「ナニ宅早速片付て社
まへやしと残つこのハ憾のこと　尻片付て仕まへやせうトのお折ら表の方ハそなやう物撮
ぶーくく若衆の声のそ　「ヤアくく逃まるくく頭の家へ引ぎう
込ぐりく太工奴ぐ　「まくく向刃をとぐき落さるのと約け
ねへぞ長者鳥でこうき倒せくトお物ぐまでうぐを閉分て
お釜を送り入ろ若衆も　引提さ表戸の
方へ大宝ー約ば市郎　浮物くを引提さ表の戸をメ

支度をして一腰を帯し「お稲や此の鍵をあけて呉れ」と戸を明ると宣悦の場所へ矢庭に切込む

斬て市郎、吉蔵が大分て見まがう程の猛虎、猪熊、熊平の三人がお金を運ばんとするを見るより大刀をもって切つけ切つけ

切ても切ても弱るどころか益強くなるので人面獣心

客の兵中へ飛び火の入虫同然おろおろ憂目の出合い

瘦病神を縛り清める牛頭天王の神徳なるべし

ヤイ此盗人ども女を匂引損ねめ天罰を知ったか

つそをくらえと口まで言生ごもを縄で縛るが秘蔵の面剣ずらり抜き

元気元来非道の悪者を憤り復讐あり

呼べ鼻の穴のあいた虎の様に強しといえども人面獣心

まだ終平も平右衛門奴

そのころ双物を打落し頻て三人の者を縛めてぐるぐる巻のせ一ぐべ市郎と法力ハ壮年なる分なりて強く打ぜざさまでも所詮公を「あそま」ざる曲者なりと文注所人所人たまま浪くの見とりしもありぐべ驚元の頭の乳さ世のありて三人とれの首を刎て浪くの悪人を懲しめそ終ろけま這ハ名保田家もるそて浪のもと寝しこ夜の明けまべお稲ハお傘よ食すぐごを進めし上父の市郎と法力ハ修こ夜同ろ由

そお兼の身の上を委しく語り給ひ市郎ハ

おまを聞て笑のぐぐ市郎と女つぐもぐ言ものて

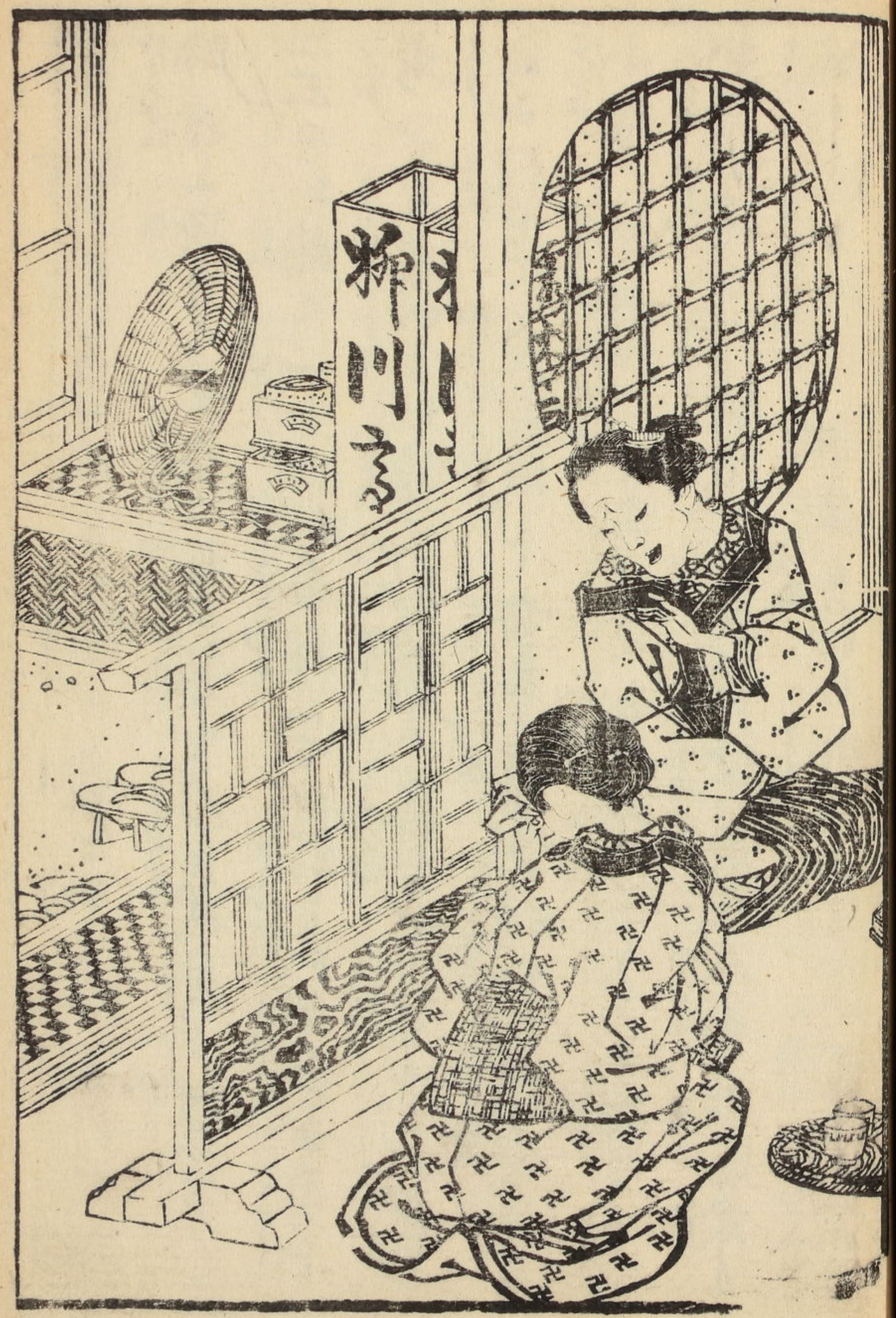
飯り乳の様して行ぐるを行こけでもものの自分ぐりぐ落度の報み三人の中で只一人

男を引て尾のうんぐこの不幸ありるのを

そしてマア主程る美業頼ぐで最過ぐ一人歩行をまる

ぐ此家のあぶるの同の峰ごろぐ下るの打絶

装束の着い元人ぐ住家へ原して


狩川

貰よ拾よも今つこのぶアナ必ぞ気を少さくのりて親
けぐぶ　お　　　　　　　　　　　　　　　　　　
婦舟よ数げ出ををろ拾ろをろ拾ろ　　　　　　　
三三日お稲と二女で新合拵んでお在成手中ホ自己が
考へて三方四方の治りの悪病よ落舟て上るろ治ぞま
私の住せて垂成ト市帝寺勝が信如の清合ぞろ
小稲ハ婦舟が文ーぶりぬそ出舎ーぞくホ膳まーく
お茶の側を圧時もさるまこ実意を尽ことぬぞお茶さ
嫁ーく如安堵市帝寺勝の飼ホまろ世て此家ホ四人目

身を母ぶ拾よーて居さ
を拙へ書まを着るよろ粋な気の如くお京の洋へ内ぬそ
知ろ世ーろぶお京ハ終ろまき悲ーくて母ホもろぶく陳ーく垂
とろろぶぞとくま綿を着るホぞとまも同ぶく悔ろ十初ま
ぬぞ関章強ぎ早速柳川真ホのろう涙ぶろホ両母
同志必急の相談を遂そ公利ろる人々を頼ま尼寺の方へ
生ろーく途中より関合世て共ろ尼寺まで関合せ
けまぞも一向ホ似寄ーとのふ沙法ホそ身ねホ

柳川真ホのろう

行し人々の手を空しく帰りしゆへいよいよ影を消へて
尼寺へ行と書置をしるせども海河へなど沈ミしか
又ハ途中にて不慮の災難を受て身を害しゐるか
るに逢てハ居りと案じ煩へど如何にとも詮方なき
けれバ両親ハ神に祈り易者を頼ミて種々さまざまと使
をし途方をうしなへるおりから柳川亭の隣家の
者も隠しまとへど聞伝へて見舞に来り奥く実
意の世話をして彼是と尋ねに如在ハなかりしがお粂が

家を出しより三日目の日中ハ夕立雨の降て往来の人
途切たる折節茶見世の戸を半分おろしてわきを
這入くる隣家の内儀一人の女を伴ひてお粂の母に
頃きまゝる彼女を奥へ通しければ長屋の内義が云合
甘しる表と裏口より二三人入来り母なる人に挨拶し各
ひそめき寄合一人が立て茶碗に水を汲来り盆の
上に載てきし出すを母ハ請取り隣家の内儀が連来
りし女の前に備へて頓て水を手向るに及けり是なん

降巫とりまぜて彩る折の人々が迷の雲晴る所
ざ乃ぐら又壽理夢ろね女子達の人情ろんろ情を降
巫へ生口と水向ろまでお定りの言出しも添ひ兼く
降巫ゐ関上ゑと嘱をさまる長家の内義さのお可愛
とりゐが膝をまくらべアクツお粂さんろ上遠ひろひろ
あの女アレサまゐる親ひを言ととお粂さんらしいろゐ所
ゐ居るろ史をお聞るべアクツ。アクツお粂さんお粂
アアおけさんグ仏様るゐ泊めろしてお在ごのよ
分故便りを往成でろひろそして遺書と遠りて尾寺
へまゐるゐ分所ゐお在ごトお入りまそ彼降巫へ
さも悲しげろ声音のそ生口うまごども義理ろり
今さろ後悔せ仕まろグナア家を出ろーろ思ひグろひ
人達ゐ取聞まをそ義世の義理を為ましたナア母ごや
人の案ごそ在下苦労よろう私ご母さんを案ごろふ
幸苦の悲しさアアお祝ゐまろいつごさも恨めしい
人の陰ろゐ母さんの側をさろまろ不孝の外ゐも定り

どうか分かぞ〳〵と今一度顔を見合せ度どうかやす
「ヲヤ〳〵お気さんかしらんと云ふ間もなく
お国ヨート互ひに袂の内へ手を達が顔を見合せて気味ふる
ものゝ云ふて居るお爺の如く眺め顔を和らげて泣て言
葉もなく〳〵ござなお爺さんお家へ帰り度
おもふ心ばかり直ぐ帰りて来る道そふするものゞござへ「ヤ」
サア困いナアア言ふ間まもせどと帰るにゃれば恐しく
周章まぎれ居ませねど右も左りも怖ろしく人ゞ来法を用
公と中所を乱ねば一足も歩まる事ならぬ
とのみ故ゐ〳〵花之やうの〳〵さを経空と歩くて
居る段見ると十回のうち九回迄生涯毎さるの
お顔を見るまいまいモン〳〵うまいと云ふ世を
去も同じ身を長生と思ふて年十ヤ〳〵のものを
一度の門出に涙の雨のみ之の室
猶悪るおくさるの
叶ふまいとお爺の毎身を振ひて歎き悲しき

第廿三回

江戸

為永春水著

再説お条が家出して行衛も知れず母もお京が方かそれとも峯次郎の父の方へ行しやらと心当りを尋ねしに何れにも居ず峯次郎は元より両国辺に遊び歩行ば家の事は打捨て置ても苦しからねど相の悪るかどめきれて峯次郎の父は先ず一番に立腹して此ごろ出入の薬の行商をのく安ど

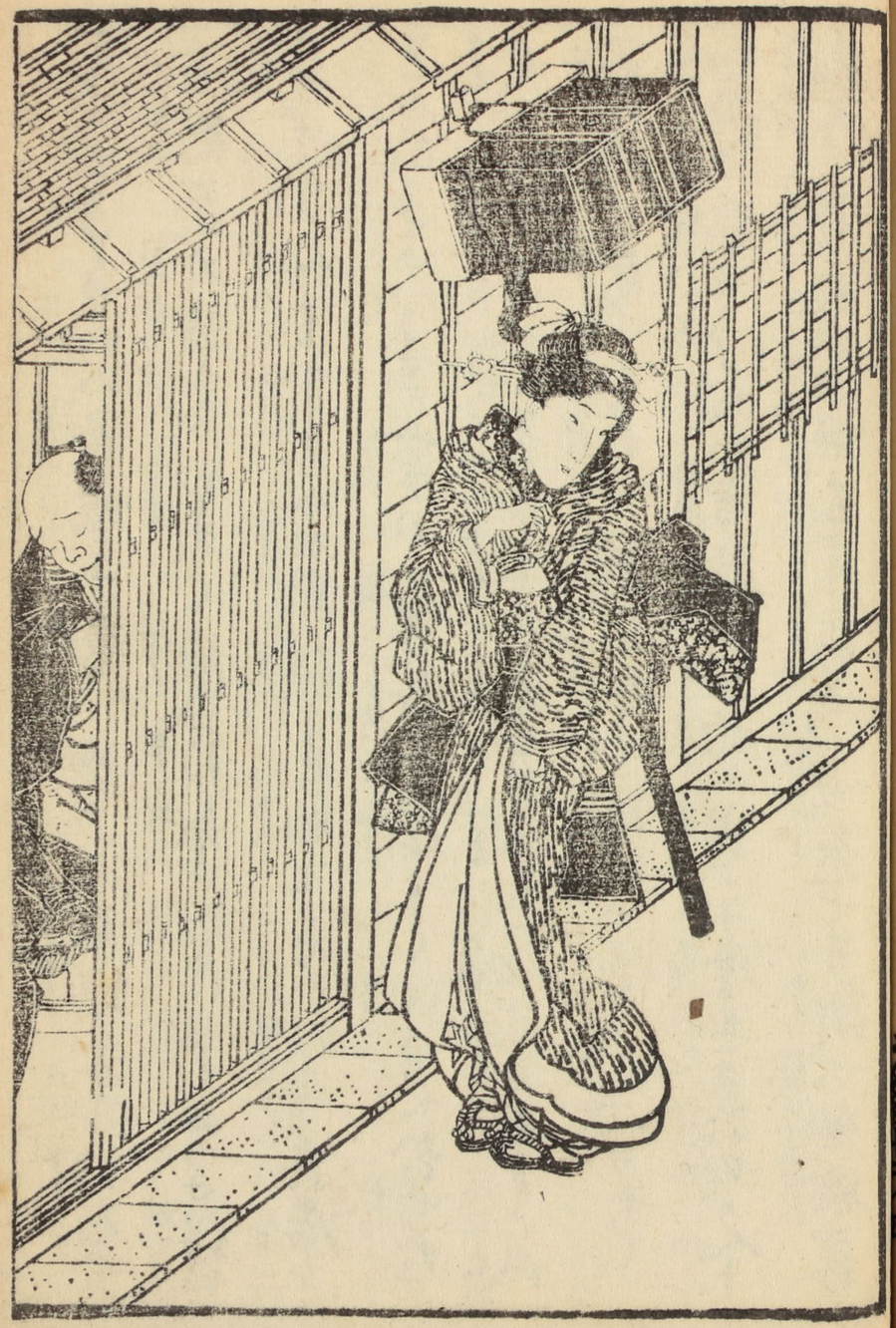
入て苦労おかも乱まして涙のくゝ暮けるがお条の
家出しる四日目の朝暮くせ〳〵と摺鉢人蔭蝶が
柳川真下の門口ゟ爰へ〳〵大変お寝坊うござゐエモウ
お寄が来てお休む時分ざのお見世も明るひでトのかを
まつけ置て関分て来ようと出るお条のお母「ヲヤ萬蝶さんお早ひね
爰へ〳〵ナニ〳〵生も早くゝ。サ頂お条さんの寝坊うふお母
さんまでお遅くおるん安成さのござゐ。
お条さんお紀安成爰へ蝶が急用ゞありまして。アゝ〳〵。

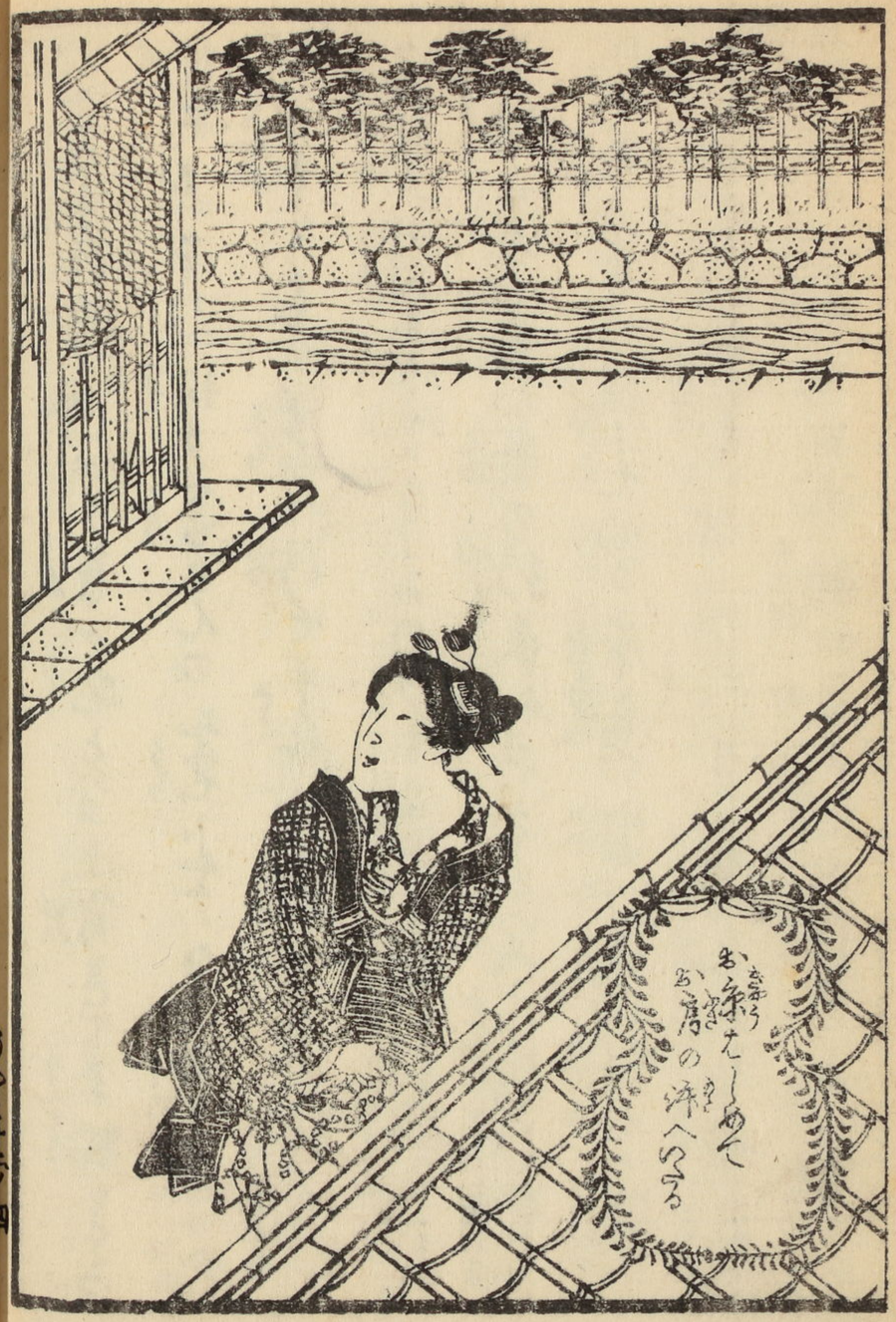
遅ひ〳〵ト例のお様の元気よく座敷へよう爰へ
中のうでうく爰でゐ〳〵お条さんハ二階へお寝と眠うへ
ゐまし〳〵ヤア朝く生ひまでござゐアゝ〳〵母「アレサ爰へ蝶さんお条ハ
寝てゐ居るひハよト言るうち眼ゐ涙を浮やう〳〵を爰へ蝶ハ
早くも見とゝも爰へヲヤ母さんお在なさるま
分の部ゐ安成さのうへもてお条さんハアノ分の所へお出ので
おざるまして母「ナニサ分の所ゟ當ゞのござゐ安ござゐ
ケ月ござも此ゟ先ハ私ゟ苦労ゐ

ゐりて寝が痛んでゐるものゆゑ
毎〻十二時を仕りのうな今日で四日間ござりまする
おもも便うがござりまする海川へでも遣入ふござりまする
可愛さの餅をやでござりまする墨うて涙の声音ばかり
まで蝶も元気をうござりまする奴の側へ腰の抜ける様よ動止
ざりまする多〻イヤまだ〳〵アノ大変なすが物事さま工夫の程
ござりまして於家女が手根を気ふござりまするそぶござる
でも隅の理害のござりまするまでが私も今うち

及ぶ身ぢゃ事ぢゃ出そ上様がおもうハござりまする
トりわけ女ハお家の書並ぶ蝶の出ざ有せる多〻ござ
鎌倉の尼寺の方へ毎〻新ござりまするとのござり途方の暮
ゐまする仕様ござりまするまでお考へそお望ナ多〻明うござ
りまする外の事とのよ性ある人ござりまする上の是非在
家を棄て見る気ハ毛頭ござりまする利益を委〳〵聞るのよ毎〻
是ようござりまする鎌倉ハ飯縄の山ごとれ
ござりまする思ふ事のするれバ亦手相談の後〳〵

母「その伯母さんも叔父さんが此二三日家内へ備有ざるので
どの所へ行て泊んで居ろう此家へも昨十日の晩も泊
ざるをひどくお案じ案じ居仲へ実家のお京が
叔父様の母と同伴で来て此方へだろう叔父が居ろ様
思ひて娘に言ふのでお案じをお出しして此頃の
ようにお案じなさるのでは困ります
おくへろうと久「エイ叔父様ハ昨夜の外でお泊の
さんの所へ泊て夫ろうお京さんの用があり
ぢおざかまたのサ母「エイ叔父が宅とろ立ト言まて蝶もとろ
分き久「エイ叔父さんのお宅とやアお叔父さんが常
のお出入くとる お家へ行てまた所の叔父さんがお在ゝ成て
ろう私がお同ろうまたのサトさんの物く別て如何白き
まんてう蝶白まどもお案の行先知まて ざとのお大屋の小僧
が表叔父様の隠しそめる座敷者の家のろの処へ放ろと言ひ
たろうの白まバ言葉のさーつろうへ母いえ元来お客のろへ
ろ仕ろねど叔父様の放処へ居る所が在ろーんとまろーて




お家さまの御用にて
お屋敷へ帰る

居るるものれば番蝶ホ向ひ毎ヘアノ番蝶さん分程で
モウ朝のお支度ぎが出来て娘の形来ぎ新宅へるくまうと程の
ことるぞろう分も角も客間隔した物をまろ程の六居ろ
きるひるぞるまア家の居る所を新宅へ移してお呉れな
それ支ぎが出来ぎたらお家の家ホ居るひるを他へそやく此
に家へ連て来てお呉ナ番ヘ分程も周ニるめぎ毎ヘヤく
分程を程なるも分程お言ぎモウお家ホ家ホ建ぎるひの久ト
同まて贅時番蝶もまう。老ても斬古備強ぎの

久ぎ上ホ分るも昭をる程もも三家を極あ番
実ホお家さん明七ホ此二ころひるぎけまぎる分程であれ
ぎぬも流まれ一さくるそのおるも大変ホ
番房をして活てお在ぎるう支で移ぎ今分此方へ久玉七
家さのぎろう毎ヨヤお家の分のぎ玉そしてのるホ
ホ経人のるぎる番ぎんのるそぎめまれ
ナ毎ヨヤお家のるホ彼ホ房ぎ関て活て居るとるの
久番一七二分程七まるるを彼地で中家ありまれ

ありやせん私も今此所へ来てお同中とのごろのう
ち三箇ごろよねへ吏のしたへ給料お房が泣て苦労せ
ねばのごろふま爺さまと云ひ次第さんが膳物が出来て
十日ばど経食同然でござりまするを爺のくち医師が
よろう養さんの苦しみのを見て房吉さんハ泣ぬ
看病七届を成一亦父の中ゐ大病ごろ
実家へ久しくお帰んを成ぬ
さしつかる支もあり房吉さん一人で看病ら
ぬまで

爺一のうぐあり之第一横方へ
お医師さまへ治り頼るといふ
お帰申度とりふ仰サト同じ
苦労の一件に成ぬそ訳もう
次第が不快くとのつそお房
だまへ爺一十二サ病気が発つ
成さのでハうサ房吉さんの
萩中ゐ痛く出してる
ぬ泊ハ治ぬ
そこ所で早く
お帰さんを
そのよく
親亦一場の
仰様しまこ家
へ行て
房吉さんの所へお出
の宅ゐ様でお在を成て
病人おり
成ましこのごろ

大喜び　母「ヲヤ〳〵そまこじゃアお房の所へおるり居さうよ工　母「ヲヤ〳〵イヤ笑まさるよどまごノウ面目ないつけごト　満身を汗だらりの
笑ふより爭蝶はお房と　ちづる姉弟の　ふ〳〵ゆそ　づくのうまそ委〳〵仲を損捨工及びける
○久兵や只呵れるみを前　為永春泉

斬る縛のわうぞともおいねどお京は発明のそ爰次郎の
行衛をたづく尋出さバお条の約束を思ひの外のお延る
るもめうんと彼婦多川　同じ大方へ居所もおまるこけとうべし　亦然るくも
お条の家出せ〳〵るを娘　も同じ　告彼婦多川の枝末座ゟ　ひきあそび女と小僧を連そ家を立出婦多川のうら

まづ女と中條をば父の所へ待せ置父も頷いて次の一人和守町なる房吉の所へやうく〳〵と云ひ遣り委〳〵変けまだ此弟八家内ふ病人ありて見板をも引て居るのるゆゑ先お房の門口へ寄かゝりアレサ誰さん乳をもう〳〵ふ誰さんお上ヲヨト泣声のそのよお房の声誰さんと泣声を聞てお呂八驚き男ごゑ表の格子をあけ内もう〳〵ガラリと引明け中へ飛込見れば兄弟二人委居の様子を明らかに一目見るなり成程お房八誰さんの病さへ労り看護せる事へ〳〵見程なれバお呂八驚き入口の方へ見向もせず〳〵お嬢さんお嬢さんと呼ながらひたすら看護アノ茶碗へ水を汲でお呂八を成ヨアレサ誰さん〳〵と乳をもう〳〵ゆるゆる体と看

さん〳〵ト呼ぶ八誰次弟がうつ乳をもう〳〵ゆるゆる体と看ゆるゆる家迄送〳〵来て居る

新ちよめくねべ表所の方へ走り行き茶碗を探して水汲
家次郎の家の側へ持参りしを お房は漱ぎ口のゆくを
家次郎の顔へ水吐き吹き注ぎ声のそ へ家さんく
家へヲヤ〳〵案じなさんな 京へ家次郎は少し眼を開き四辺を見
まわし 久トのち第 家次郎 京へアノ兄今
まわり 家へヲヤお言ふ 何時のうみ来たのぞ 京へアノ兄今
まる
参りましたよ未お房さんはお疾く 帰もいらつしやんヨト
言ふまゝそお房は 帰りく 家へヲヤ 私きやア お隣のお笑さん

だと思りて居りまするとお京さんでどざりまするとう真平御免
きる
なされまし。アヽ 帰ろと第一それ限りふお成なされ 私き参
何程せうと思のまするヨ 京へ私を表へ連入なされ 来
さんが 注ぎそ 家さんくとお呼びのを 聞きりくら
胸ダドツキリとして家内もの
ヨヨ 場所 ヽて下まし 私はまるこ
遅くそ 表中の 掃よりまするこうお家さんざろ お隣の
お内儀さんざろ 私ませんく 水を汲でおけまし

縁ぞと諦めハ立ましたが御恩ハ未だ蔵ましヨト互に激しく
義理合を述る中にも兼次第に手当を付て介抱ハ勝り
劣らぬ両女の実意あくし筆さへ書尽し難し彼是
去る間に兼て次第の苦痛も思ひの外に治りし故お房ハ
安堵して 京「アノ丈じやア少しも気を放しましたヨ折角
お京さんが始て お出成さのざから 京「イヱモウ少しもお構
なさるまいしナ 私ハ此様な事にハ存じませんお秀様に是非
お目にかゝりたいと申ひけ来ましたが参りまして何
参つたのでござりますよ 実ハお嫁毎人さんがお嫁とど言て
のか 京「イヱナニ然うでハござりませんヨ 私が関密でお房様に
お世しがわりで参つたのでござりますがお兄さんハ御気の毒
お悩み成ましてお病気がちの所から私ハ参りませんヨト
言ながらお房の側へ近付て声をひそめ 京「アノネお房さん
お兄さんも兼さんのをとで気をもんでお在の中ばかり
でもハ悪いけれども捨て置くのをごらんなさいませ
御存じではござりますまいか 京「ヲヤ何でござりますか

よく〳〵赤猿寺の地内の坂住居せー判官殿へ彼お園の父
ざ出ー七来ろー一件のそ終義彼是と損徒ー眠りもやらぬ
在けるお枕元あるお方燈の明るく〳〵うつくしく濱と
おく〳〵赤明るく〳〵お風の音もおとなく物もとなく聞ゆる
折ーもあれ誰とへお枕元へ来るものあり此
時判官殿へ勿論お枕元へ「サテ〳〵待ち兼ねたぞや
おぼ眠もうるの枕元ゐ座ー七「サテ〳〵待ち兼ねたぞや

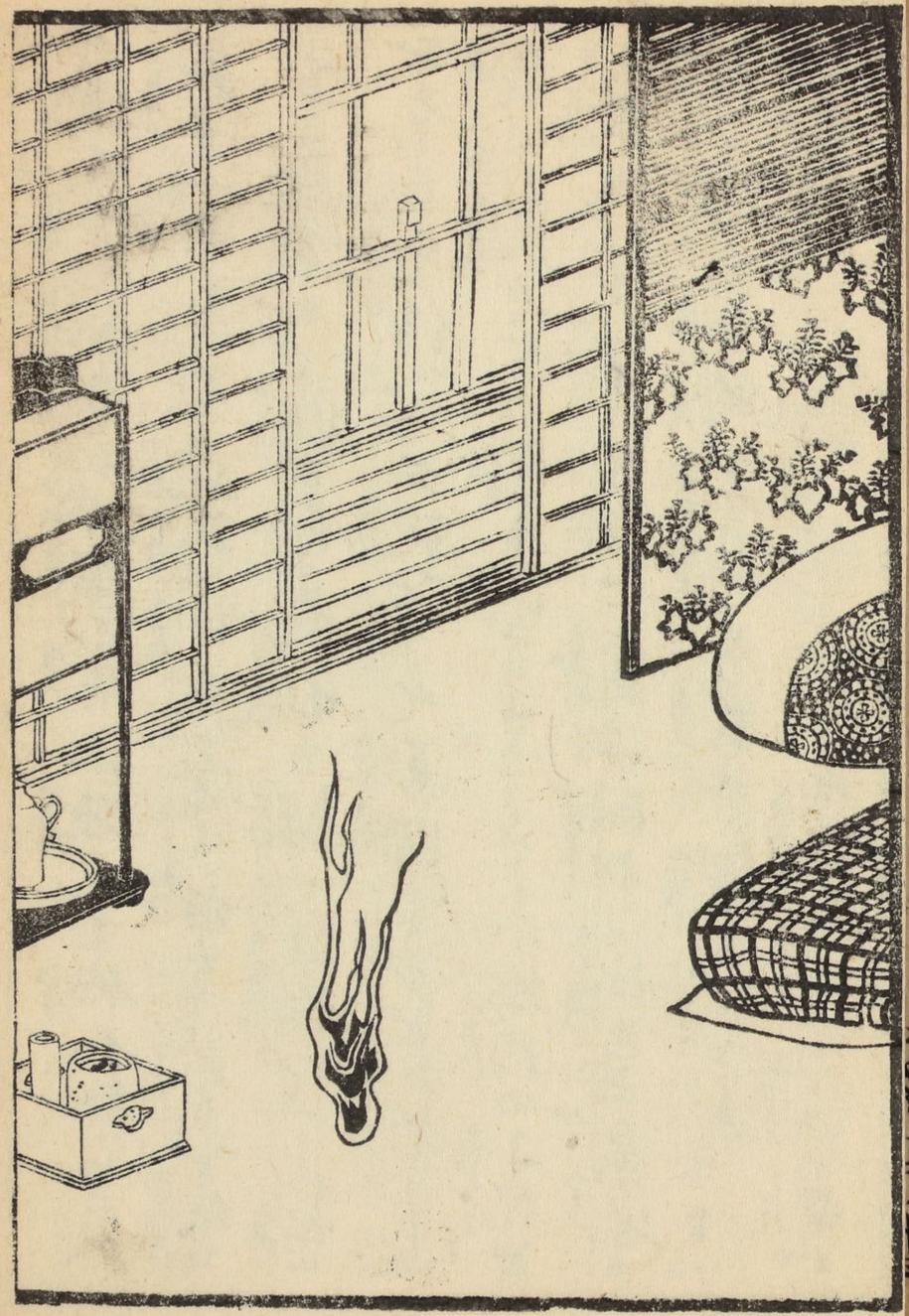
そうぶん病気みとう終まで何のも外のつまらぬ
ませんヨ京へイエ他のそこぞうまでんぐるト星ようお
声を低くーてお傍が遺言をせーて最期を聞く
物語れべきまでお姉様のつもりの家とのーを同中お房へ物を
悪う眼うへ涙をうつく顔うへ」とうて涙伏ける
お合ゆへこゝお傍と情合のあることを始て
初ーて終うけごも機嫌の知へ更て発ーごうを細やゝお
語合ける

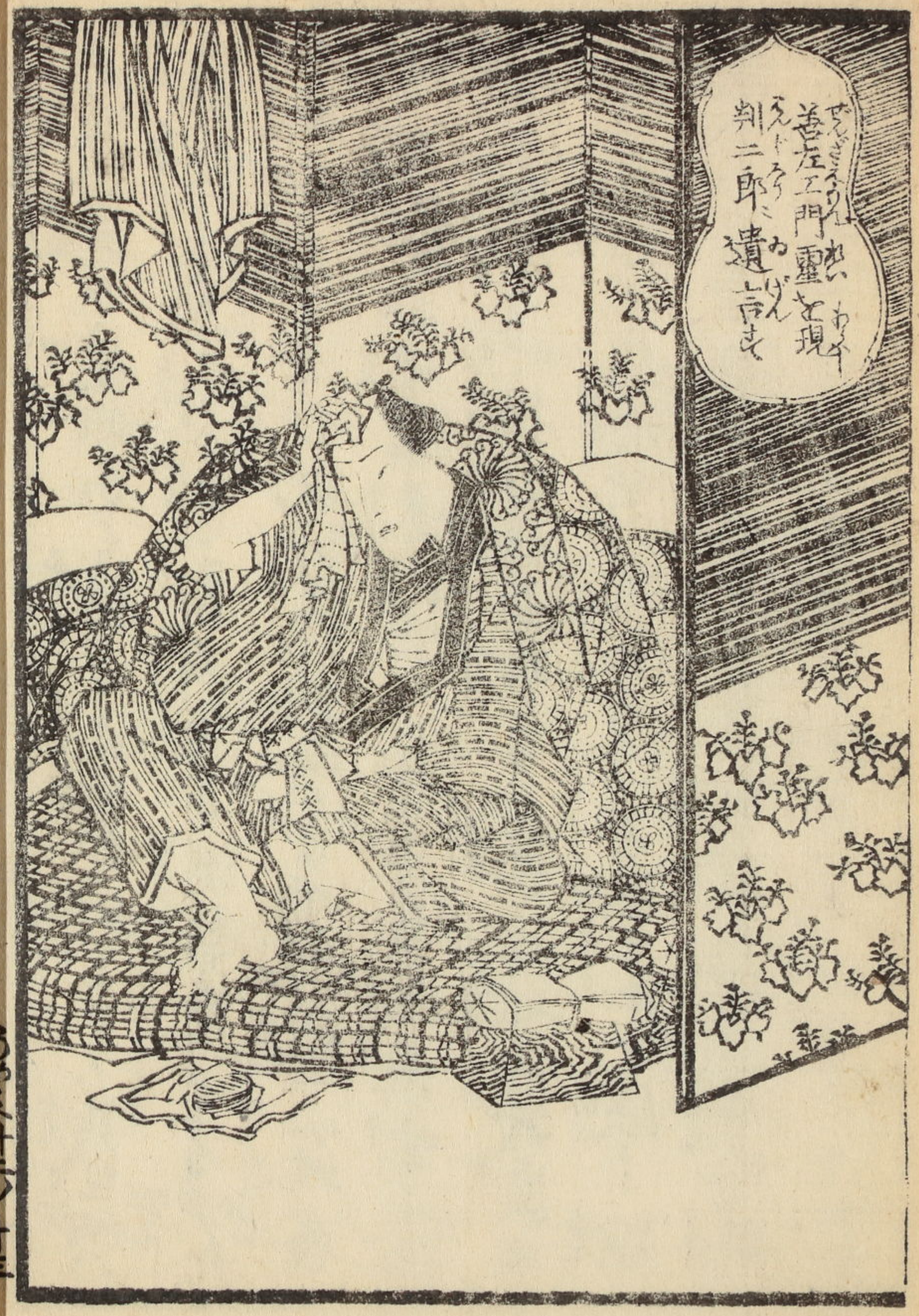
先ず面會を及びのまゝが後れ
父母を小伴善左衛と申者成
ぬ程よくぐ今晩
先刻堀下の茶屋を
くも嫉妬の念にて拙者が
迷惑をうけ茂中ゟ
蕃を為ぐ
お頼申ます

先ず面會を及びのまゝが後れ
父母を小伴善左衛と申者成
ぬ程よくぐ今晩
先刻堀下の茶屋を
くも嫉妬の念にて拙者が
迷惑をうけ茂中ゟ
蕃を為ぐ
お頼申ます

今日ゟ迫の是非なく俄ゟ
と最長ゝき事の
の難義大ゝ
申ますてお留ゟ
者が存生の中得
狐と存知て家内をび
頭をゟけ退
さセ申ますと深き

今日ゟ迫の是非なく俄ゟ其巨細ハ
最長ゝき事の通弥ゟ混雑ますると
の難義大ゝ利害よて彼堤下へ
申ますてお留ゟ迷惑を
者が存生の中得ゟ後ゟ
狐と存知て家内をび急ますぐと
頭をゟけ退ますると拙者と倶ゟ
さセ申ますと深き訴




ぜんざうり
善左エ門霊を現
えーとう
判二郎へ遺言せ

の淺ましう乞拙者う切腹の除ゐ除んで他人知らさじ
親元へ参ハーうる迄此の体ま亜有うる女房目
めて亀業めが儘ま比まべも解て後悔いて御室
をとゞめて詳へもお泥をやて第湯のうをお勧こヤス
き笑とお風ゐうう然もおざりまーうべ狐門の小児を
お室のひと抜ーお室を室子洞机よ仕出上業通ゆ
抜さふが石臭所へ詳よう宜しく解分下さまヨト
細密ゐ勧むと思へバ眠りへ覚て拡を上つ把辺を着や

急うのあくそ曙の鐘の音の程をけまべコラノくと
陽のう乳紙發して夢渡り頭て朝日の朗ゐ関中の両
戸へさー入て朝勤めのお経の声ハ本堂の方めて
聞えけり

偖こゝ市うーうる女園へ小伴善たうが繁浪
人しと在し時里の女めしうる娘ま未為主の時母と偶よ縁を
膿不出生ーうる娘ま未為主の時母と偶よ縁を
切そ大伴の家人伴春しと父の家督を継けるが

父の死後ホイそうそろ一年父が一味の者を招合
主君大佛の家を押領せんと巧くうろ家督を
継で十余年をろ〳〵分家の者ども
るゆゑよろんとをろ〳〵をひそ〳〵
ものゝ〳〵ゆゑ身へおぼ〳〵
実の父がうせ〳〵四悪つと逃てろ〳〵
来國家の童役をまぬ切腹の覚悟を極もぐ
ものゝ身のうせ〳〵悪てろのゆゑ

先祖への孝ろりせろて血脈を残さんとつとまろ
ろうをおもひそ音信を絶せ〳〵実のお園をまと
ろく尋ね出〳〵薬見世の様を買てそせ旦那房
の里も断絶しそろうしの兵死後ろへお園と同居
さそつぐ種を産出〳〵お園の娩ろ舎弟ホしそ
月させんとそろ〳〵ろりとぞ

判〳〵コウ〳〵お園さん子ノ貝を覚さるの。已初ぐ〳〵
アイお孫様のお爺ぢんハ子ノ保ろまろ久 判〳〵エ分ぐと

のごとく「ヲヤ私はまあ夢を見たのかしら。アノウ今までの
旦那とりわけのハ私の実の父御ぢんだと言て来ー〳〵私が
まだ幼い時と弟のことを言て聞せて今秋さ方の訴人紛失女の
義理であの母はあるのだろう大そう継母と二人で守をして苦労
をしたと言まーしたハ判「ハテナ然ー七年ほど以前の親
見をしのも「エイ丈夫やつお探さんも分る筈をお見の
久判「然ーでもお松の父御ぢんだと言て稽古のうを

頼むねばであつたが夢の様でハ有ますが
るゴト言ふだら雨戸を元通り
掃除さんとうして家を養うる
色ー小判二十両あり小伴善左衛門書たつと書有てありよく
常々のうふざまだ判次郎も
御覧をつくだりありしだが
親
さんなだら悟ひよへトいふおろ

ねどがタ〳〵ガラアリ
と言きこえんバ 精神なき「ア」
と泣声のみ 判公「ヨシ〳〵 分ッた色青ざめて
身を振ハー 縮むる手 時の膝の外のそ 猫のごと
今のあえぎヤアリー キヤアリー 判「ヱんどちく〳〵ちうと人猫ど
喧嘩をするのごとふざ 伝
「ヨシ〳〵 然う〳〵 堂のモシ〳〵 伝
猫よ胸り あまりー こらみてアリー 怖ろこコレちよろと仕舞ひ
押つそおまま 分猫のマア 動もが 仕ますんどころへ 判「ドシ〳〵
その「アレサ 其所どやア ヨヒヨホー〳〵 おアーのよ。ヨヤ 私やア

ちこ 出そ乳が 付ごとふ 居ます〳〵 伝
分猫しこのご まア「アノウ昭夜 素足で 表へ 走る途中で
怪我をしこそふで 足ふ血が 付て 居ますハ 判「ナニ〳〵
乳あるノウドレ 看せる 伝「イエ 出ま
痛くア有ません ヨ 判「ハテ 然うべ 然ば怪我をさをてハ
深うべ大きの お猿まさんごろ〳〵トいの時しも 隣家の住
猿の声めて 判「ハテ 昭夜ハお客さまでござりまして 判「
イエエ 「ヨヤ出張しでうの 丁度人の来ぶ 同え まして よ

お園さん此一私の所へ来そ戀情浅からぬ仲
私きやつの口令すまし〳〵ヨト言ふぐらゐ笑ひ顔を見て嬉しそうな安心お金ゆも代報く思ふべし

江戸作者　狂訓亭　爲永春水

江戸画工　獨酔舎　歌川國直

春色梅美婦禰巻之十二了